

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌 [リクシル・アイ]

no. 4

February 2014

特集

- | | | |
|---|------------|--------------------------|
| 1 | 新・生き続ける建築 | 櫻井小太郎 |
| 2 | 建築ソリューション | 新宿駅西口広場・地下駐車場 |
| 3 | まちづくりの今を見る | 地元力を発掘するコミュニティデザインのまちづくり |



風景をデザインする 海外編

地形尊重—現代のデザイン

台湾・苗栗縣

古今東西、人々は、地形に合わせて建築を風景に定着する方法を考え続けた。風水もそのひとつの方法である。北の玄武、東の青龍、西の白虎、南の朱雀は、山・流水・大道・池と対応し、都市機能を支えた。鴨長明の方丈も庵を北に寄せ、南は懸樋で岩水を呼び込み、西は谷で開き、西方浄土を暗示した。一方、シト一派の修道院は、溪流の上に配置したクロイスター(回廊)を中心に北に礼拝堂、東に寝室と食堂を配し、地形と人間の営みが一体化する方法を確立していた。

この建築は国際コンペにおける最優秀案の実施であり、台湾に17世紀から移住し始めた人の民族文化を伝える博物館と研究所の複合施設である。アジアのユダヤ人とも言われ全世界へ華僑として渡った客家人の代表的民族精神が、この風水をもとにあらゆる環境に住居形式を順応させる自然共生の理念に現われている。そこで緩やかな造成地に建つ建築は、元の丘陵のスカイラインを想起させる屋根と、既存地形の傾斜をできる限り利用した床面によって主空間を構成した。また中央部を走っていた谷の形状を、内部を横断するプロムナードや3次元の屋根で形象化し、南側は風水を受けて三日月型の水盤を配した。これらの操作により、建築が与えられた環境に極力順応し、周辺の大地に溶け込んだ一体の風景となることで、自然共生の理念と呼応しようと考えた。

萩原 剛

Takeshi Hagiwara

プロジェクト概要

名称：苗栗客家文化園區
(Miaoli Hakka Cultural Park)
所在地：台湾苗栗縣銅鑼鄉
主要用途：博物館、研究所
発注者：台湾行政院客家委員会
設計：ランドスケープ・建築：竹中工務店+
劉培森建築師事務所
敷地面積：43,148m²
工期：2009.1-2012.5

はぎわら・たけし—竹中工務店東京本店設計部設計第2部長/1961年生まれ。1985年、早稲田大学大学院修了。同年、竹中工務店入社。2005年、早稲田大学非常勤講師。主な作品：草津トリヴィア[1992]、ホテルオーク静岡[1996]、東京サンケイビル[2002]、オーベル東京ビル[2006]、足立学園中・高等学校[2007]など。



上—北側からの鳥瞰全景：丘陵地形との一体化を意図したフォルム[提供：竹中工務店]
| 下左—南側の三日月池からの外観[写真：大野繁]| 下右—夜景[写真：小川重雄]

CONTENTS

表紙写真：
新宿駅西口広場・地下駐車場
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.5は、
2014年6月発行予定です。

[LIXIL eye]はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 海外編]
地形尊重 —— 現代のデザイン —— 萩原 剛

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 4**
櫻井小太郎

04 [本論] 英国で学んだ建築家・櫻井小太郎の軌跡 —— 河東義之

08 [作品] 旧呉鎮守府司令長官官舎 (呉市入船山記念館)
静嘉堂文庫
横浜正金銀行神戸支店 (現・神戸市立博物館)

14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション — 4**
新宿駅西口広場・地下駐車場

22 [序論] 広場とは何だろうか —— 「透明な空間」としての新宿西口広場 —— 中島直人

24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者

土木と建築、官と民…

その相乗効果で完成した新宿駅西口広場・地下駐車場。

—— 阪田誠造 | 藤木忠善 | 古谷誠章

37 [鼎談後記] 建築を超えた大きな空間に、よどみのない人々の流れをそそぐ —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 4
画家・デザイナー、葵・フーバーさんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 4**
地元力を発掘するコミュニティデザインのまちづくり

44 [序論] 日本型住民参加のまちづくりの原流 —— 地域を学ぶことの大切さ —— 木下 勇

46 [インタビュー] コミュニティデザインとは、地域の回復力を高めること —— 山崎 亮

48 [コラム] 住民の思いを吸い上げ、地域自治の実現を目指す
—— 20年以上続く住民主体のまちづくり支援 —— 伊藤雅春

50 [事例1] まちづくりの原点は人づくり —— “よそ者”との交流で海土の魅力を引き出す

52 [事例2] 大規模な団地コミュニティの再生に挑戦 —— 住民と地元・千葉大学によるコミュニティ・ビジネス

54 [事例3] 暮らす人にとって魅力あるまちに再構築する —— 地元の活動から“移住者が楽しめる熱海”を提案

56 [事例4] 官民協働で“身の丈の開発”を展開する —— まちづくり会社「飯田まちづくりカンパニー」の活動

58 [素材を語る]
侘び寂びのコルテン鋼 —— 椎名英三

60 [TOPICS]
ジオ・ボンティが語る「建築を愛しなさい」を再現から読み解く —— 後藤泰男
手仕事によるデザインタイルを現代の技術で再現 —— 小関雅裕

64 [INFORMATION]
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL 出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 4
日本の地形や文化、生活…どのように思っていますか? —— 妹島和世 | 隈 研吾

LIXIL eye no.4
2014年2月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：安岡淳也
マーケティング本部
LIXIL eye 編集室
〒100-6011
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング11階
Tel: 03-6273-3492
Fax: 03-6273-3539
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきました

櫻井小太郎

Kotaro Sakurai

1892年、日本人初の英国公認建築家・櫻井小太郎が誕生した。明治維新後、官界並びに書家としても名を馳せた櫻井能監を父に、梅室の名で知られる俳人の櫻井能充を祖父に持つ名家の執自だ。その影響で文学を志したが、「道楽と本職を兼任させるもの」を問い重ね、建築学に転じた。

西洋建築の本場で学ぶため、父の親友、帝大総長を介し、辰野金吾に留学の助言を求めた。渡英の準備としてジョサイア・コンドルの自宅に通い、やがて辰野に同行して渡航。1889年、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジに入学し、ロジャー・スミスの事務所で働きながら、美術的建築学科を最優秀の成績で卒業、弱冠23歳で英国公認建築家試験に合格する。帰国後、再びコンドルの指南を受け、曾禰達蔵の推挙により、海軍技師を経て三菱合資会社地所部の建築顧問に就任。丸の内オフィス街の建設に携わり、三菱地所をリードし、活躍した。54歳で独立し、晩年は、自ら設計した静嘉堂文庫で、漢籍に親しむ日々を送った。

ロンドン大学、ロジャー・スミスに師事するという、奇しくもコンドルと同じ道を歩んだことになる。今号は、生涯、英国にこだわり、コンドルから曾禰に続く、英国らしさの系譜を受け継いだ櫻井小太郎の生涯を振り返る。



【出典：『櫻井小太郎作品集』】

1. はじめに

明治期において、わが国建築界の発展に尽くした建築家として名前が挙げられるのは、ジョサイア・コンドル先生を別格とすれば、彼の教えを受けた辰野金吾や片山東熊、曾禰達蔵などに始まる工部大学校造家学科の卒業生と、その後身である帝国大学工科大学造家学科(後に建築学科)の卒業生にほぼ限られていた。明治末年まで建築学科のある大学は帝国大学(東京帝国大学)だけであったのだから当然のことではあった。その中で、海外に渡って建築学を修めた建築家が数人知られている。フランスで学んだ山口半六(国立パリ中央工芸学校卒業)、アメリカで学んだ小島憲之(コーネル大学卒業)と妻木頼黄(同)、ドイツで学んだ松ヶ崎萬長(ベルリン工科大学中退)、そしてイギリスで学んだ櫻井小太郎である。

2. 生い立ち

櫻井小太郎は、明治3年[1870]に東京神田今川町で櫻井能監の長男として生まれた。櫻井家は代々加賀藩の刀研師を務めた家柄であったが、祖父の能充(梅室)は「天保の三大俳家」の一人と謳われた俳人であった。また父の能監は維新後官界に入り、内務大書記官、宮内大書記

官、内大臣秘書官などを歴任した官僚であったが、一方では錦洞と号し、書家および漢詩人としても知られた人物であった。小太郎少年も森槐南に漢詩を学び、その才能には定評があったと言われている。

櫻井が東京府尋常中学校を経て第一高等中学校に入学したのは明治18年[1885]である。当初は父や祖父の影響もあって文学の道を志していたが、次第に世の中の役に立つ実学を模索するようになったという。絵が達者だったこともあり、文学的な才能も活かせる工学分野として彼が選んだのが建築学であった。熟慮の末に英国に渡って建築学を学ぶことを決意し、明治20年[1887]、第一高等中学校を予科2年で退学している。

その後、櫻井は父の親友であった帝国大学総長の渡邊洪基の紹介状を持って工科大学教授の辰野金吾を訪ね、その意思を伝えたとされる。辰野は、まず建築の素養を会得する必要性を説き、コンドルの下で指導を受けることと、工科大学造家学科の聴講生になる便宜を図っている[1]。

3. 英国で学ぶ

明治21年[1888]、櫻井小太郎は日本銀行本店建設の調査のために渡欧する辰野金吾に同行して日本を出発し、米国を経てロンドンに到着した。翌年9月にはロンドン大学のユニバーシティ・カレッジ(UCL)の建築学・築造学部に入学生、美術的建築学科と学術的建築学科の2学科に在籍した。同校の教育内容に関しては、在学中の櫻井から『建築雑誌』に「倫敦大學校校則抄譯」と題する報告が寄稿されている[2]。卒業したのは明治23年[1890]7月で、卒業試験の結果、美術的建築学科が第一等でドナルドソン銀牌を獲得し、学術的建築学科は第二等で書籍を授与された。また在学中から2年間、ロンドン大学教授で建築家でもあったロジャー・スミスの建築事務所に実習生として入所している。辰野の斡旋と伝えられているが、スミスの事務所で働きロンドン大学で建築学を学んだコンドルと同じ道を歩むことになった。櫻井は当時を振り返り、「ロジャ、スミス氏は温厚親切な典型的の英國紳士で、私が二年間其許に働いて得ましたところは、實際の智識よりも寧ろ日夜の接觸に依つて受けた自然の薫陶であつなやうに考へられます」と述べている[1]。

明治25年[1892]6月には英国王立建築家協会の会員資格試験に合格し、準会員(ARIBA)の資格を獲得した。わが国ではコンドルが明治17年[1884]に正会員(FRIBA)に昇格してはいたが、日本人建築家としては櫻井が初の英国公認建築家となった。その後、ヨーロッパ各地を回って明治26年[1893]11月に帰国している。

4. コンドル事務所から海軍技師へ

帰国後、櫻井小太郎は再びコンドルの下で働くことになった。コンドルはすでに明治21年[1888]に設計事務所を開設しており、当時は幾つもの大建築を手掛けていた。櫻井が担当したのは本格的なネオルネッサンス様式のドイツ公使館であった。櫻井はコンドルの指導の下で設計図の作成や現場監督を努めたとされるが、彼にとっては建築家として初めての貴重な経験であったに違いない。

明治29年[1896]10月、櫻井は海軍技師に採用され、呉鎮守府に赴任した。当時各鎮守府には、本省から独立して監督部(後に経理部)建築科が設けられていたが、呉鎮守府の建築技師は建築科長の渡辺讓(工部大学校2期生)と櫻井の2人だけで、その他はすべて技手であった。そのため多くの施設が着任したばかりの櫻井の担当になったという。明治34年[1901]4月には英米に出張して鎮守府の工場用鋼材の検査や購入にあたっており、米国の鉄骨造技術の導入に指導的な役割を果たしたとされる[3]。その後、明治36年[1903]11月に呉海軍経理部建築科長となり、明治41年[1908]10月に横須賀海軍経理部建築科長に転じ、大正2年[1913]に海軍技師を退官した。なお、櫻井は海軍での業績に対して、同年9月に正五位勲四等を授与され、大正4年[1915]2月には工学博士に推挙されている。

海軍時代に櫻井が手掛けた建築に関しては、「海軍が擴張に擴張を重ねた際として、直接の軍事上の建設物の外に、學校、病院、廳舎、工場等君の(櫻井の)手に成つた建築は多種類に涉つて



横須賀鎮守府司令長官官舎[1913]
中央に腰折れ屋根を架けて前面をチューダー様式のペランダとし、左右にハーフチンバーの妻壁と尖り屋根のベイウィンドーを配する。先行する呉鎮守府司令長官官舎に比べて一段と華やかであるが、非対称でビジュアルレスク風の構成を受け継いでいる【出典：『新横須賀市史別編 文化遺産』】



台湾銀行東京支店[1916]
櫻井が三菱に入社して最初に手掛けたSRC造の銀行建築。外壁1階は石張りの古典的な意匠であるが、2階以上は化粧煉瓦張りの壁面を縦長に配し、上部に装飾を集中させている。内部の営業室はゼツェシオン風の軽快な空間であった【出典：『明治大正建築写真集』【建築学会・明治建築資料に関する委員会編、日本建築学会/1936】】

[1] 櫻井小太郎の生い立ちや経歴に関しては、『櫻井小太郎作品集』[中村勝哉編、櫻井小太郎作品集刊行会/1930]所収の「櫻井小太郎傳」(中村勝哉)が最も詳しい。しかもこの小伝は櫻井が存命中のものであることから、おそらく内容は櫻井から直接話を聞き、さらに彼の校閲を受けていると思われ、死去後の伝記に比べると信頼性も高い

[2] 櫻井小太郎「倫敦大學校校則抄譯」『建築雑誌』1889.10

[3] 『新横須賀市史 別編 文化遺産』[横須賀市編、横須賀市/2009]所収の「第一編 近代化遺産 付録 明治期における横須賀海軍建設組織と建築技術者」による



三菱仮本社 (22号館) [1918]
三菱本社の旧館で、完成直後に新館の増築工事 [1921] が開始されている。外壁を石張りおよび白色煉瓦張りとし、装飾を排除した簡素で軽快な建築であるが、左右非対称にこだわったのは櫻井の意図であろうか [出典：「丸の内百年のあゆみ 三菱地所社史 (上巻)」 [三菱地所社史編纂室編、三菱地所 / 1993]]



三菱仲 15号館 [1919]
大正期になって次々に建設された仲通りのオフィスビルは、いずれもゼツェンション風の軽快な建築が目立っていた。その代表例が三菱仲 15号館である。櫻井が若いスタッフに求めた「近代的」な大正建築であった [出典：「丸の内百年のあゆみ 三菱地所社史 (上巻)」]



三菱銀行本店 [1922]
正面のイオニア式列柱と営業室の大空間が人々を圧倒したが、外観の構成は極めて単純・明快で、ニューヨークのナショナル・シティ・バンクを彷彿とさせる。鉄骨材は米国カーネギー社製で、構造は佐野利器が担当。設備機器や内外装材も欧米からの輸入品がふんだんに用いられている [出典：「明治大正建築写真聚覧」]



丸ノ内ビルディング [1923]
鉄骨幟壁造 8階建てのアメリカ式オフィスビル。外観は1階を人造石、2階以上をクリーム色の煉瓦タイル張りとした軽快な建築であったが、関東大震災 (1923年9月) 後の復旧工事で中空煉瓦造の幟壁がRC造に改修されたことから、外壁もモルタル吹付けに変更された [出典：「明治大正建築写真聚覧」]

[4] 石原信之・桜井広一・野生司義章「人物風土記 第20回 日本で最初のARIBA受賞者 桜井小太郎先生」『建築士』(日本建築士会連合会) 1960.12

其量も極めて多い」[1]とされるが、軍港内の建設物であったことからその大半が不明である。櫻井が直接設計したことが知られるのは数件に限られるが、そのうち呉鎮守府司令長官官舎 [1905]と横須賀鎮守府司令長官官舎 [1913]は櫻井ならではの作品で、いずれも英国の郊外住宅を思わせる瀟洒な邸宅建築である。

5. 三菱の建築家として

大正2年 [1913]3月、櫻井小太郎は海軍の先輩でもあった曾禰達蔵の推薦を得て三菱合資会社地所部の建築顧問となり、翌3年2月、正式に同本社技師に就任した。当時の地所部に在籍した建築家のうち、技師は櫻井一人であった。大正7年 [1918]8月には新たに設けられた技師長に就任している。

櫻井が地所部で最初に手掛けたのは帝国鉄道協会 [1916]と台湾銀行東京支店 [1916]、そして三菱仮本社 (22号館) [1918]である。このうち台湾銀行東京支店は外壁に赤煉瓦を張った華麗な建築であったが、平坦な壁面と垂直線を強調した内外部の意匠は明らかに明治の赤煉瓦建築とは異なっていた。三菱仮本社もまた、中央付近に塔屋を設けながらあえて左右対称を崩し、外壁から古典的な装飾を払拭した当時としては斬新な大正建築であった。入社早々に担当となった石原信之によると、当初はチューダー風の外観であったが、櫻井からもっと近代的にせよと命じられたという[4]。自らのスタイルにこだわらず、若い建築家に新しいデザインを求めた櫻井の配慮がうかがえる。翌年竣工したゼツェンション風の三菱仲 15号館 [1919]も事情は同じであったのかもしれない。

大正期に櫻井を筆頭とする地所部が総力を挙げて取り組んだのは、三菱銀行本店 [1922]と丸ノ内ビルディング [1923]の建設であった。三菱銀行本店は鉄骨鉄筋コンクリート造 4階建ての大建築で、正面にイオニア式の古典式列柱を設けて外部を石積みとし、内部に吹抜けの大空間を持つ丸の内初の本格的な銀行建築で、昭和初期に次々と建設された古典的な銀行建築の先駆けとなるものであった。同様の銀行建築は、すでに長野宇平治設計の三井銀行神戸支店でも実施されていたが、三菱銀行本店では、極力装飾を廃して古典建築の単純さや荘厳さを強調する姿勢が際立っており、むしろ新古典主義の影響を感じさせるものであった。

一方、丸ノ内ビルディングでは徹底した合理性が求められ、米国式の高層オフィスビルが導入された。大正8年 [1919]に入って地質調査が実施され、櫻井を中心に設計が行われた。翌9年1月、櫻井は石原と川元良一を伴って米国に渡り、フラー社と設計の打ち合わせや工事方法の検討、地所部との合弁会社 (東洋フラー社) の設立準備などを行っている。着工は大正9年7月、わずか2年7ヵ月という当時としては驚異的な短期間で竣工した。機械を駆使した米国式の近代的施工方法は、その後のわが国の建設技術の発展に大きな役割を果たしたとされる。

大正12年 [1923]4月、櫻井は地所部を依願退社し、石原を始めとする10名程度を引き連れて櫻井小太郎建築事務所を設立した。丸ノ内ビルディング竣工に伴う技術系職員の整理にあたって自ら率先して退社したものとされるが、その際、櫻井の設計ですでに工事中であった東洋文庫 [1924]と、計画あるいは設計中の三菱銀行京都支店 [1925]および静嘉堂文庫 [1924]が櫻井小太郎建築事務所を受け継がれた。その後も櫻井は銀行や住宅を中心に多くの建築を手掛けたが、昭和10年 [1935]竣工の横浜正金銀行神戸支店を最後に現役を引退している。

6. 建築家・櫻井小太郎

櫻井小太郎は、明治期に海外で学んだ数少ない建築家であり、日本人としては初の英国公認建築家として知られている。しかし前半期を海軍鎮守府で過ごし、主として軍事施設の営繕に携わったこともあって、同じ海外組でも山口半六や妻木頼黄のように記念碑的な明治建築を残したわけではなく、その業績は公的な評価 (勲位や学位) にとどまっている。櫻井の本格的な活躍はむしろ三菱合資会社に入社してからで、地所部を率いて明治期には見られなかった新しい大正建築を丸の内オフィス街に次々と生み出していった。その業績は建築家としてだけでなく、組織の長としての管理能力や経営面にまで及んでいる。もちろん、この時期の代表作が三菱銀行本店と丸ノ内ビルディングであることに異論はない。



その一方で、建築家・櫻井小太郎を特徴付ける一連の作品が存在する。海軍時代の呉鎮守府司令長官官舎に始まり、横須賀鎮守府司令長官官舎、荘清次郎別邸 [1916]、東洋文庫、静嘉堂文庫などに至る比較的小規模な建築である。いずれも大屋根の左右に妻壁やベイウインドーを非対称に配したピクチュアレスク風の建築である。邸宅ではハーフチンバーやチューダー様式を採用し、文庫ではより簡素で近代的な表現を試みている。櫻井は、海軍でも三菱でも、むしろ米国とのかかわりが強かったが、これらの作品は見事に一貫して英国風であり、丸の内の本格的な建築とは明らかに異なっている。

櫻井を最も良く知る石原信之によれば、櫻井は当初から「スマートなジェントルマン」であったが、言い出したらきかない頑固な性格も持ち合わせていたという[4]。文学 (漢詩) や芸能 (能、謡曲、鼓) を趣味としたこともよく知られている。このような櫻井の人物像は、彼が教えを受けたロジャー・スミスやジョサイア・コンドルに重なる点が多い。櫻井は、終生、英国で学んだことと、2人の英国人ジェントルマンを師としたことにこだわりを持ち続けたのではないだろうか。

晩年になって世田谷区用賀に引っ越した櫻井は、弁当を持って静嘉堂文庫に通い漢籍を見るのが日課であったという。その静嘉堂文庫こそ、櫻井が設計し自ら図面を引いた自信作でもあった。

或る住宅の設計
『櫻井小太郎作品集』には「或る住宅の設計」と題して掲載されているが、周りの風景や人物などから英国留学中のスケッチと考えられる。櫻井の作品のうち、住宅や文庫などの中小建築に共通するピクチュアレスク風の原点とも言える田園住宅である。代表作の静嘉堂文庫は特に共通するところが多い [出典：「櫻井小太郎作品集」]



三菱銀行京都支店 [1925]
鳥丸四条の交差点に向かって入り口を開き、上部に2本のイオニア式円柱を掲げているが、側面はすべて付け柱とし、そっけないくらい平坦である。同様の構成は横浜正金銀行門司支店 [1934]でも採用されており、正面中央部の古典式列柱のみを強調する櫻井独特の銀行建築である [写真：筆者]

かわむしがし・よしゆき——建築史家 / 1943年生まれ。1967年、東京工業大学理工学部建築学科卒業、同大学助手。1976年、小山工業高等専門学校助教授。1989年、同校教授。1990年、工学博士 (東京工業大学)。1999年、千葉工業大学工学部教授、小山工業高等専門学校名誉教授。2008年、千葉工業大学定年退職。2011年-、文化庁文化審議会委員。
主な著書：『明治の西洋館』 [新人物往来社 / 1979]、『ジョサイア・コンドル建築図面集 1-III』 [中央公論美術出版 / 1980.1981]、『総覧日本の建築 2』 [共著、新建築社 / 1989]、『図説日本建築年表』 [共著、彰国社 / 2002]、『建築史 (増補改訂版)』 [共著、市ヶ谷出版社 / 2010] など。

旧呉鎮守府司令長官官舎 (呉市入船山記念館)

竣工年：1905年
所在地：広島県呉市幸町4-6
構造・規模：木造平屋建
【重要文化財】



1 洋館玄関ロビーのステンドグラス
玄関の両開き扉には緞とサクラ、オリーブなどをあしらったすりガラスと、その上部と両側に幾何学模様
のステンドグラスがはめ込まれている。櫻井好
みの控え目で上品な意匠が特徴である

2 同正面全景
中央部に寄棟造の屋根を葺き下ろしてポーチを設
け、両側に切妻造の客室と応接室を張り出す。妻
壁はどちらも英国風のハーフチンバーで飾るが、大
きさも意匠も意識的に左右非対称として変化を求
めている

3 和館西面外観
洋館の背後には、長官や家族が日常生活を営むた
めの伝統的な和館が接続している。会議や接客用
の洋館と居住用の和館とを併設するのは、当時の
政府高官官舎では一般的であった

4 洋館客室
洋館では最も重要な部屋であるが、壁面の金唐革
紙を除けば、むしろ控え目である。軍人の邸宅であ
ることを考慮したとも考えられるが、それが櫻井の
好みでもあったのだろう。なお、金唐革紙を含めて
1995年に内外部の復原改修工事が行われている



静嘉堂文庫

竣工年：1924年
所在地：東京都世田谷区岡本2-23-1
構造・規模：鉄筋コンクリート造2階建



1 2階客室
南側にベイウィンドーを設けた2階の客室は、文庫という建物の性格もあってか、意外なほど質素である。当初、広間を挟んだ西側の部屋も客室であったが、後に書斎や文庫長室として使用された

2 2階広間
1階広間の奥から階段を上ると2階の広間に至る。南側正面にはつくり付けの木製長椅子が設けられ、その上部に矩形の連続窓が開かれている

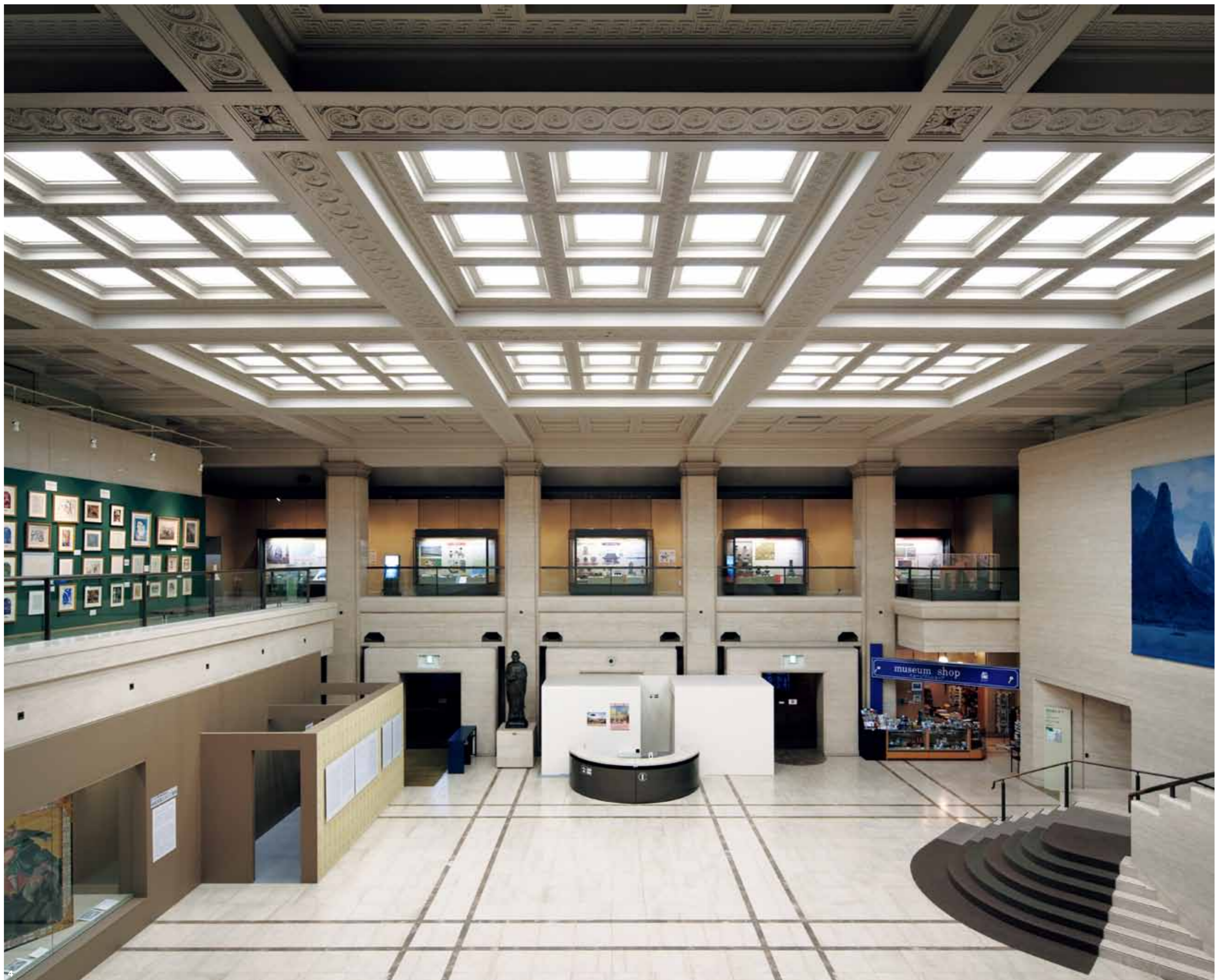
3 1階広間
正面玄関に続く1階広間は、壁面を板張りとした落ち着いた空間である。東側中央付近にタイル張りの暖炉が設けられ、上部には三菱2代目社長岩崎彌助の号である「静嘉堂」の額が掲げられている

4 正面全景
外壁はRC造スクラッチタイル張りで、正面にアーチを設け、左右に大きな妻壁とベイウィンドーおよび煙突を配する。その構成は櫻井が英国留学中に描いた田園住宅に原点が求められるが、素朴さと近代性を併せ持つ櫻井の自信作である



横浜正金銀行神戸支店 (現・神戸市立博物館)

竣工年：1935年
所在地：兵庫県神戸市中央区京町24
構造・規模：鉄筋コンクリート造3階建



- 1 正面全景**
三菱銀行本店の構成を受け継ぐもので、単純な構成によって正面の古典式列柱と花崗石積みの壁面を強調している。1982年に増改築が行われ、神戸市立博物館に転用されたが、外観は当初の姿である
- 2 正面入り口**
6本のドリス式列柱が古典建築の威厳を印象付ける。入り口に近付くほど列柱の壮さが認識されるが、櫻井は装飾的なコリント式は好まず、三菱銀行本店もヘレニズム風のイオニア式であった
- 3 玄関ホール**
上部にギャラリーが新設されたために高さは縮小されたが、天井は当初の格子天井を移設している
- 4 大ホール**
旧営業室は博物館の大ホールとして改修し、2階には周囲にギャラリーが新設されて窓も展示用パネルでふさがれている。しかし、古典的な装飾を施したメタルシーリングの格子天井やイタリア産大理石の床と列柱はそのまま保存され、吹抜けの大空間と共に当初の面影をとどめている

略歴 Biography

明治3年[1870]	9月11日、櫻井能監の長男として東京神田今川町に生まれる				
明治18年[1885]	第一高等中学校に入学。当初は文学の道を目指したと言われる	明治26年[1893]	「修學旅行報告」を『建築雑誌』に寄稿。欧州の建築視察に出発	大正7年[1918]	8月、地所部が地所課となり(翌年、再び地所部に改組)、初代技師長に就任
明治20年[1887]	第一高等中学校を中退。渡英して建築学を学ぶことを決意。帝国大学工科大学造家学科の聴講生となり、傍らジョサイア・コンドルの指導を受ける	明治27年[1894]	3-5月、「羅馬府建築論」を『建築雑誌』に連載。11月、帰国。12月、造家学会正会員。同月、造家学会主催講演(「伊太利建築の話」)	大正9年[1920]	1月、米国へ出張(フラー社と丸ビル建設の打ち合わせ)。3月、東洋フラー社設立(1925年5月解散)
明治21年[1888]	8月、辰野金吾に同行して横浜を出航。米国経由で渡英。アートスクールで絵画を学ぶ	明治28年[1895]	ジョサイア・コンドル建築事務所に入所。ドイツ公使館の設計・監督に従事。6月、結婚	大正11年[1922]	建築学会会館競技設計審査委員長
明治22年[1889]	9月、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジの建築学・築造学部に入学。美術的建築学科および学術的建築学科に在籍。10月、「倫敦大學校校則抄譯」を『建築雑誌』に寄稿	明治29年[1896]	11月、造家学会評議員	大正12年[1923]	2月、東洋フラー社の常務取締役役に就任。4月、三菱合資会社を退職し、櫻井小太郎建築事務所を開設
明治23年[1890]	ロジャー・スマイス建築事務所の実習生として入所(2年間に在籍)。6-8月、「英國中古ノ家屋」を『建築雑誌』に連載。7月、ユニバーシティ・カレッジを美術的建築学科は第一等、学術的建築学科は第二等で卒業。英国建築協会の給費研修生に選ばれ、サマーセット地方の实地調査を行い、その報告によって同協会賞を受賞	明治34年[1901]	2月、造家学会主催講演(「病院建築法」)。10月、海軍技師に採用され呉鎮守府に赴任	昭和2年[1927]	8-11月、「建築漫談」を『日本建築士』(日本建築士会)に連載。建築会館競技設計審査委員。
明治25年[1892]	6月、英国王立建築家協会の試験に合格し、準会員(ARIBA)の資格を得る。10月、	明治36年[1903]	4月、英米に出張。鎮守府施設用鋼材の検査や購入にあたる	昭和3年[1928]	建築学会副会長。建築会館取締役会長に就任
		明治38年[1905]	11月、呉海軍經理部建築科長に就任	昭和5年[1930]	10月、『櫻井小太郎作品集』刊行
		明治40年[1907]	芸予地震(6月2日)の被害復旧にあたる	昭和7年[1932]	第一生命保険相互会社本館競技設計審査委員
		明治41年[1908]	台湾總督府庁舎懸賞設計に応募	昭和8年[1933]	東京水工交社本館競技設計審査委員
		明治45年[1912]	10月、横須賀海軍經理部建築科長に転任	昭和10年[1935]	第一線の実務から引退
		大正2年[1913]	大阪市庁舎懸賞設計に応募(第二等)	昭和20年[1945]	建築学会名誉会員
		大正3年[1914]	3月、海軍技師を退官、三菱合資会社地所部建築顧問に就任。9月、正五位勲四等を授与	昭和28年[1953]	11月11日、逝去(84歳)
		大正4年[1915]	2月、三菱合資会社本社技師に就任		
			2月、工学博士に推挙		

主な作品 Works

●印は現存

明治35年[1902]	呉造兵廠砲熕製造所(広島)	大正13年[1924]	東洋文庫(東京)
明治38年[1905]	●呉鎮守府司令長官官舎(現・呉市入船山記念館)(広島)【重要文化財】	大正14年[1925]	●静嘉堂文庫(東京)
明治40年[1907]	●呉鎮守府庁舎(現・海上自衛隊呉地方総監部第一庁舎)(広島)【推定】		●成蹊学園本館(東京)
明治42年[1909]	●大湊水源地沈澄池堰堤(青森)【重要文化財】		荻窪齒科診療所(東京)
大正2年[1913]	●横須賀鎮守府司令長官官舎(現・海上自衛隊横須賀地方総監部)(神奈川県)		横浜正金銀行本店(震災復旧工事)(神奈川県)
大正4年[1915]	乙の頃、和田維四郎邸(東京)		三菱銀行京都支店(京都)
大正5年[1916]	帝国鉄道協会(東京)		川島邸(東京)
	台湾銀行東京支店(東京)	大正15年[1926]	松平家津田別邸(香川)
大正6年[1917]	●莊清次郎別邸(現・古我邸)(神奈川県)		第一東京弁護士会館(東京)
	三菱仲13号館(東京)	昭和2年[1927]	時事新報社(東京)
	三菱仲14号館(東京)		横浜正金銀行接客所(神奈川県)
大正7年[1918]	三菱仮本社(22号館)(三菱本社旧館)(東京)		三菱銀行船場支店(大阪)
大正8年[1919]	三菱仲15号館(東京)		永代橋ビルディング(東京)
	三菱仲12号館(東京)	昭和3年[1928]	柏原邸(東京)
大正9年[1920]	三菱仲2号館(東京)	昭和4年[1929]	鳥羽商店(東京)
大正10年[1921]	三菱仮本社(22号館)増築(三菱本社本館)(東京)		明治生命広島支店(広島)
大正11年[1922]	三菱銀行本店(東京)		帝国生命館(東京)
大正12年[1923]	丸ノ内ビルディング(東京)	昭和6年[1931]	横浜正金銀行名古屋支店(愛知)
	曾根増吉別邸(神奈川県)		田中邸(東京)
		昭和7年[1932]	三越札幌支店(北海道)
		昭和9年[1934]	●横浜正金銀行門司支店(現・山口銀行門司支店)(福岡)
		昭和10年[1935]	●横浜正金銀行神戸支店(兵庫)



晩年の櫻井小太郎
最晩年の櫻井は足が不自由で専ら自宅で詩作にふけていたが、その一方で、亡くなるまで住宅のスケッチを続けていたという。『建築雑誌』に追悼文(「櫻井先生を偲ぶ」)を寄稿した石原信之は、わが国の建築界が「純英国型の建築家」を失った寂しさをつづっている[出典:『建築雑誌』1954.2]

※この頁は、『日本の建築[明治大正昭和]8 様式美の挽歌』伊藤三千雄・前野巖著[三省堂/1982]をもとに、筆者と編集部が制作したものです

取材協力: 呉市入船山記念館/公益財団法人静嘉堂 静嘉堂文庫/神戸市立博物館
おことわり: 08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

新宿駅西口広場・ 地下駐車場

新宿、渋谷、池袋を副都心とした再開発決定は1958年である。翌年、東京都首都整備局は副都心計画の一環として新宿駅西口広場・地下駐車場の基本計画に着手した。当時の新宿駅西口周辺は、焼け野原同然の寂しい風景が続いていた。坂倉準三はル・コルビュジエの下で学んだ輝く都市の経験をもとに、「谷川の水の流れる如く…」をテーマにした立体広場をもって、新宿駅西口を一変させた。

地下広場は専門家を巻き込んだ徹底検証の後、中央開口案が姿を現した。1966年11月である。太陽光が地下広場にまで降り注ぎ、輝く噴水の流れとスムーズな人の流れは新時代の到来を印象づけた。さらに官と民、土木と建築の協働が生んだ立体広場として高い評価を受け、日本建築学会賞にも輝いた。ところが1969年、学生運動やフォークゲリラによって“広場”は瞬く間に“通路”へと名称の変更を余儀なくされ、都市における広場の在り方を社会に問いかける舞台にもなった。

半世紀を経た今、新宿駅西口は乗降客・350万人を超え、超高層ビルが林立する巨大都市になった。公共と民間、広場と都市、そして設備と防災など、パイオニアが示唆したものはどう引き継がれたのだろうか。





竣工時の概要

事業主体	広場：財団法人新宿副都心建設会社 自動車駐車場：小田急電鉄
設計	坂倉準三建築研究所
監理	坂倉準三建築研究所、小田急電鉄臨時建設部
施工	鹿島建設、野村工事、間組、西松建設、三菱電機
設備	桜井建築研究所
構造	RC造
規模	地下2階（一部、地下3階） 地上広場：24,600m ² 中地階機械室：2,770m ² 地下1階広場：16,800m ² 地下1階店舗：3,940m ² 地下1階機械室他：1,730m ² 地下2階駐車場：20,000m ² 地下3階駐車場付帯施設：770m ² 合計延床面積：46,010m ² （地上面積を除く）

15頁—小田急百貨店側から見る | 16-17頁—広場に面した西向かいの松岡セントラルビルから見る中央開口部：スロープが接している緑地は、竣工時は「水と光の広場」として注目を集めた噴水のある地下庭園。地下まで自然光が差し込み、水と光がきらめく日本初の立体広場と言われた。平成23年度にリニューアルされ、現在はサツキの緑地帯 | 18-19頁—中央開口部の夜景：竣工から半世紀を経た現在は、地上には高層ビルが林立する華やかな光景に変わった | 20頁上—コンコース：デパートとJR、小田急線、地下鉄線、京王線などをつなぐコンコースには人の行き来が絶えない。竣工時は、外に出ることなく乗り換えができるで大評判だった | 20頁下—地上階につながる階段：インテリアは床、壁ともに温かみと潤いのあるタイル張り。また、それぞれが自己主張しないよう、地下から地上まで、方向性を持たないカラーの乱張りで統一され、階段や腰壁部分にその名残がある | 21頁上—緑に覆われた換気塔：広場のシンボルとなった換気塔は、ツタの絡まる独特の表情を見せている。ツタの下はタイル張り | 21頁下—地下駐車場：附置義務駐車場も含め420台の公共駐車場がある。万一の災害時に備え、泡消火、スプリンクラーなどの消火設備の他、排煙設備、CO₂検出メーターによる換気の調節など、設備には万全を期している





広場とは何だろうか——「透明な空間」としての新宿西口広場

「穴」が生み出した「光と緑の広場」

ル・コルビュジエから「ユルバニズム」の精神を受け継いだ坂倉準三の設計で1966年に完成した新宿西口広場は、地上および地下2層の立体都市空間である。坂倉渾身の建築的ソリューションは、楕円形の大きな「穴」を中央に開けた点であった。この「穴」によって、地下広場に地上の光が注ぎ込むようになった。

新宿西口広場の敷地自体は1948年6月に戦災復興土地区画整理事業の一環として確定していた。しかし、1958年7月に首都整備委員会において淀橋浄水場の移転とその跡地の再開発による新宿副都心の建設の方針が正式に決まったことで、想定していた将来交通量は飛躍的に増大し、戦災復興で生み出された敷地面積では到底収まらなくなった。1960年6月には新宿副都心建設計画として都市計画街路と広場事業区域が決定された。都市計画街路のレベルは淀橋浄水場の濾過池の底面＝地下に合わせることになった。新宿副都心の玄関口である新宿駅西口駅前の広場事業区域では、地上レベルの道路と浄水場跡地の再開発街区からくる地下レベルの都市計画街路をどう取り付けるかが新たな課題として設定された。

広場事業区域の設定と共に、小田急、京王、国鉄、地下鉄の4社で協定が結ばれ、各々が広場を取り囲むように新たに駅ビルを建設し、地下1階レベルで歩行者同線を揃えた総合ターミナルとすることが決定された。新たに建設される駅ビルには駐車場法に基づく駐車場設置義務が課されたが、建物の地下は線路・ホームであったので駐車場には使用できず、協議の結果、駅前広場の地下に代替としての公共駐車場を設けることになった。

ほぼ身動きの取れないこうした計画設計条件の下での坂倉渾身の「穴」は、そもそも地階の換気方法の検討から生まれたアイデアであった。地下に自動車が降りてくることで生じる排気ガスをどう地上に放出するか。採用されたのは、換気は給気のみとし、広場全体を正圧に保ち、中央に開口を開けて自然排気させる、というものであった。この「穴」の内側には噴水も設置され、「水と光の広場」としてデザインされた。世界一の乗降客数を誇る巨大ターミナル駅の膨大で複雑な交通動線を限定された空間に収めるべく巧みに処理しつつ、新宿副都心の玄関にふさわしい都市スケールのシンボリックな「穴」を備えたこの立体都市空間には、全国各地からの視察者が後を絶たなかった。鉄道と駅の文化を高度に発達させてきた東京のひとつの極が、この「穴」を穿たれた新宿西口広場なのである。

「透明な空間」が映し出してきたもの

しかし、新宿西口広場を特徴付けているのは「穴」だけではない。竣工当時、東京大学丹下研の佐々木隆文は、「全体の中での位置は分からない。分かる必要はまったくないのです」、「上に登るにあたって、地下を歩くにしても、明確なシステムによって、それを知らせるストラクチャーはもうなくて、ルーズなストラクチャーを適当に区切って使った」とその空間の特徴を評した。そこでは「不安は人間の内部で解決してもらわなければならない。しかし、そうすると、人間は西口広場にながら、自分の内側や、友人、恋人といった西口広場という空間の特殊性とは関連のないものによりかからなければならないようになってしまう」と指摘していた[1]。同じようなことを、芝浦工業大学の藤井博巳は「設計者がこの膨大な空間を、あるいは人の流れを、分析し、計画することを放棄してしまったかのように、階段が、エレベーターが、壁が、空間が、ただそこにあるだけのように感じられる」、「人と空間の膨大な量と激しい動きによって稀薄になった空間がある」、「そこには表情をもたないノッペラボウな空間がある」と評した[2]。

確かに、俯瞰的視野ではなく、歩行者の視点でこの広場を認識しようとしても、空間的なオリエンテーションがなかなか見い出せない。「穴」でさえも、この広場では背景に過ぎず、目に入ってくるのは迫力ある人の流れだけである。坂倉準三の下で実際にこの広場の設計を担当した東孝光は「人々の動きを強制せずに自由に泳がせてしかも混乱させないようなスペース」という意味で「透明な空間」を目指したと解説している[3]。しかし、その「透明な空間」は、坂倉ではなく、そこに集った人々によって、色を塗られていく。

新宿西口広場の最も幼い頃の強烈な記憶は反戦フォークソングゲリラの姿であろう。完成からしばらくすると、新宿西口広場には三々五々、討論集会の輪が出来るようになり、やがて反戦フォークソングを歌う若者たちであふれるようになった。1969年の夏には5千人もの若者が広場に集い、反戦歌を合唱した。一部過激派の学生たちが起こした暴動を押さえるため、機動隊が出動した。そして7月18日、「西口地下広場」は突如「西口地下通路」に名称変更され、「ここは通路で立ち止まらないでください」とアナウンスされることになった。あの時代、なぜ人々はこの場に集まったのか。「豊かさ」に向かう戦後日本で増幅されていった不安が「透明な空間」に凝集し、爆発した。結果としては、「広場」から「通路」へ、自由空間から管理空間への遷移が進んだ。

1980年に地上のバスターミナルで起きた痛ましい新



宿西口バス放火事件も、新宿西口広場の忘れられない記憶である。1942年に現在の北九州市に5人兄弟の五男として生まれたMは、家庭環境に恵まれず、義務教育さえ満足に受けられなかった。成年になり、建設現場の作業員として全国を転々とし、途中、家庭を持ったがすぐに崩壊した。都会の「まなごしの地獄」にさらされながら何とか辿り着いたのが、新宿西口広場であった。地下広場に通じる階段に座って、一人で酒を飲んでいたMに、誰かが「邪魔だ」と罵声を浴びせた。その日の夜、Mはバスの後部座席にガソリンと火の付いた新聞紙を放り込んだ。バスには、Mにはない安定した仕事と幸せな家庭を持った人々が乗っていた。賑わいを見せる夜の新宿西口広場の大衆の前での大惨事となった。新宿西口広場にいたMとは誰だったのか。「豊かさ」からこぼれ落ちて一人、地下広場へ続く階段からも追いやられそうになった時、Mが次に向う場所はどこにあったのだろうか。

1990年代初頭、新宿西口広場に増え始めたのがホームレスたちの段ボールハウスであった。当初主に都庁へ向かう地下通路に居を構えていた彼らは、動く歩

道と「オブジェ」という名の突起物の設置によってその場を追われると、地下広場へと流れしてきた。地下広場は、少なくない数の人たちの日常生活の場として生きられることになった。当事者のみならず(というよりは)、警察や近隣組織、あるいは支援組織、ボランティアなどの各アクターが続けた抵抗と排除の攻防は、公共空間は誰のものか、その自由と管理はどうあるべきか、という問いを発信し続けた。しかし、1998年2月の早朝に段ボールハウスの一角から火が出て、死者を出す惨事となり、彼らは自主退去することになった。こうした90年代の新宿西口広場の騒動は、その後、全国各地の同様の攻防の原型となった。

つまり、新宿西口広場が社会に与えたインパクトは「透明な空間」であったが故に生まれた事件である。佐々木は「不安は人間の内部で解決してもらわなければならない」という新宿西口広場の特性を指摘したが、透明でそれ自体色を持たない空間は、その時々々の社会や人々の内面、不安や矛盾、衝動を時に激しく映し出す鏡となった。そして、新宿西口広場は常に自問自答し続けてきた。一体、広場とは何だろうか。

なかじま・なおと——慶應義塾大学環境情報学部准教授／1976年生まれ。2002年、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程中退。同専攻助手、助教、イェール大学客員研究員などを経て、2013年より現職。専門は都市計画。
主な著書：『都市美運動—シグニフィカートの都市計画史』[東京大学出版会／2009]、『都市計画家石川栄輝—都市探求の軌跡』[共著、鹿島出版会／2009]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

●ゲスト●
阪田誠造
Seizo Sakata
建築家(左)
藤木忠善
Tadayoshi Fujiki
建築家(右)



土木と建築、官と民… その相乗効果で完成した 新宿駅西口広場・地下駐車場。

どういきっかけて
坂倉準三建築研究所に？

古谷 | 『LIXIL eye』の「建築ソリューション」では、第1号で東京タワー、第2号で香川県庁舎、第3号では、市民と建築という視点で菊竹(清訓)さんの都城市民会館、そして、今回の第4号では新宿駅西口広場・地下駐車場を取り上げます。これまでの建築作品に対してもうちょっと都市的な規模を持っているプロジェクトですし、日本の戦後、それから後の都市の成長の過程を見た中でも、その先駆けとなったプロジェクトだと思います。資料を見ますと、随所にバイオニアとしての気概に満ちた文章を拝見しますし、同時にそれを経験した後で、公共と民間、建築と都市、それから設備といったようなさまざまなものが、どう統合されていくべきか…など、この新宿西口広場の経験を通して学ぶことが多いと、あちこちに述べられています。今日は実に半世紀も前の作品になる新宿駅西口広場・地下駐車場の仕事を、基本設計から坂倉準三さんの下でやってこられた阪田(誠造)さんと藤木(忠善)さん、当時のことをよく知るお二方においでいただきましたので、詳しくお話を伺いたいと思います。

まさに今日、2013年11月27日から国立近現代建築資料館で「人間のための建築—建築資料にみる坂倉準三」という展覧会が始まりましたが、この新宿西口広場も多くの人々が日常的に使う駅前広場として再整備されたものです。その中で坂倉さんは常日頃から流動する人々の動線計画というようなものに心砕かれたのではないかと思います。追々その核心に迫っていくとして、最初はおふたりがどういきさつで坂倉準三建築研究所に入られてどんな仕事をされたのか、そもそものお話から伺いたいと思います。まず阪田さん、どういきっかけだったのでしょうか。

阪田 | 私は、1945年終戦の年に早稲田大学専門部工科建築科に入学し、専門部の後、理工学部建築学科を1951年に卒業しました。さて、どこに就職するかと考えた時は、ル・コルビュジエにつながることから、前川(國男)事務所が坂倉事務所と思ったのですが、早稲田の先輩不在の坂倉準三建築研究所の方が新鮮な感じがして、同級の合田信雄と一緒に武基雄先生に就職のお願いをしました。

古谷 | それは何年頃ですか？

阪田 | 1951年です。その年に武先生は第1回サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展建築審査員としてブラジル建築協会に招聘されるんです。そのブラジル渡航に坂倉さんを誘われて、同行するんです。帰途は北米から欧州、トルコ旅行を共にされました。

古谷 | ところで、最初はどんな仕事だったんですか？

阪田 | クラブ関東の住宅を手伝ったり、藤木忠善さんの先輩・長さんの下で家具の設計をしたり、いろいろでした。

古谷 | 長大作さんですね？ そうですか。ところで、藤木さんはどういきっかけて坂倉事務所に入られた

のかをお聞かせください。

藤木 | 私が東京芸大の建築科に入学したのは1952年、卒業が56年です。どういう時代かと言いますと、メーデー事件で学生が大勢、逮捕されたりした時代です。建築科では設計課題がいろいろ出て、海外雑誌を読んでネタを探すわけです。その頃はアメリカの情報誌は芝公園にあったアメリカンセンターの図書館で建築関係の雑誌を見るわけですが、各大学の学生が大勢来ているという時代でした。当時、助教授だった吉村順三先生にも非常に関心があって、吉村事務所に行こうかな、なんて何となく思いながら過ごしていました。ちょうどその頃、『国際建築』に出ていた難波高島屋新館・半地下のニューブロードフロアーの記事を見つけました^[1]。色刷りが珍しい時代でしたが、平面図が色刷りで載っていました。

古谷 | 1951年にね…。

藤木 | そう。ちょっと茶色がかった色刷りで、とても目立ちました。そこに坂倉さんの文章も載っていました。“谷川の水の流るる如く…”というような文章だったと思います。それを読んで「すごい人だな…」と思った。もちろん坂倉さんの名前も作品も知っていました。でも、その記事が坂倉事務所に行く大きな動機になったと思います。ニューブロードフロアーのような社会的な仕事が面白そうだという感じがしたんです。それともう一つは、南海球場(大阪スタジアム)の外壁で、PSコンクリート板を吊るして建て込んだ作品です。これも『国際建築』で紹介されていたんです^[2]。このPSコンクリート板は渋谷の東急会館でも道路側の大曲面壁に使われていました。技術的にも造形的にも「すごいことやるなあ」と思いました。そういうことがあって、「ここしかない」と思ったのです。恐る恐る吉村先生に「坂倉事務所に行きたい…」と言って推薦状を書いてもらいました。面接したら「すぐ来なさい」という話になって…というわけです。

古谷 | 先ほどおっしゃったニューブロードフロアーの『国際建築』に掲載されていた文章はこれですね。「谷川の水の流るる如く美しい顧客の流れがよどむところなく流れてゆかなければならない」。

藤木 | まさにそれです。今、思い返せば、それは坂倉さんの全作品に流れていると思いますね。

古谷 | そこに強く引かれたということですね。

藤木 | 当時、そういう仕事をしている建築家がいなかったんです。住宅とかモダンリビング的なものが多かった。坂倉さんだけが飛び抜けたスケールの建築家に見えました。

古谷 | もともと都市的なものに関心があったんですか？

藤木 | 特にそれはなかったですが…。

古谷 | でも住宅じゃない方が良いと思われたわけでしょうか？

藤木 | その時は住宅じゃない建築の方が建築家らしい仕事だと思ったんでしょう。住宅だけじゃちょっと飽き足りない…と。



坂倉準三 [提供: 坂倉建築研究所]
1901年、岐阜県に生まれる。1927年、東京帝国大学文学部美学美術史科卒業。1929年、渡仏。フランスで建築修業後、1931年、ル・コルビュジエのアトリエ入所。1937年、パリ万国博覧会日本館で建築部門グランプリ受賞。1940年、坂倉建築事務所設立。1946年、坂倉準三建築研究所に改称。1948年、坂倉準三建築研究所大阪支所開設。1964-68、日本建築家協会会長。1967年、アメリカ建築家協会海外名誉会員。1969年、逝去(68歳)。正五位勲三等瑞宝章。
主な作品: 神奈川県立近代美術館 [1951]、羽島市庁舎 [1959] など。



大阪スタジアム [1950] [出典: 『建築家坂倉準三 モダニズムを生きた人間、都市、空間』 [神奈川県立近代美術館編、アーキメディア / 2009]]

[1] 「高島屋大阪難波新館・改増築」『国際建築』1951.6

[2] 「大阪スタジアム」『国際建築』1950.8

古谷 | 住宅と都市的なものを、両極に見られた感じが面白いですね。ところで、最初の仕事は？

藤木 | 東急会館の2階に東横のれん街という店舗街が出来て、そこの宣伝パンフレットなんです。

古谷 | パンフレット？ 最初の仕事ですか!?

藤木 | そう。先輩の駒田(知彦)さんが東急百貨店から頼まれて困っていたらしく、入りたての藤木にやらせよう…という話になったんだと思います。朝から晩までパースばかり描いていました。東横のれん街に入るテナント募集のためだったのか、お客さん用だったのか忘れましたが。

古谷 | 芸大のご出身だからパースはお手のものでしょう(笑)?

藤木 | でも、それが大変な結果を招いて、他のチームの人まで僕のところへパースを頼みに来るようになったんです。

古谷 | パースの才能を発揮しすぎた(笑)。ところで、おふたりが入所されたのは、ほぼ同じ頃になりますね?

阪田 | 僕が先です、1951年…。

古谷 | 阪田さんが51年で、藤木さんは5年くらい後になるわけですね。藤木さんが入られた時には、すでに渋谷の東急会館は始まっていた?

藤木 | 終わったばかりでした。テナント募集のパンフレットをつくったわけですから…。今考えますと、東横のれん街はデバ地下の走りでしたね。

阪田 | そうね、当時、渋谷には井の頭線もあったし、地下鉄もありましたからね。

古谷 | 聞いたところでは、渋谷の一連の仕事は東急電鉄の会長、五島慶太さんが坂倉さんのニューブロードフロアーの実績に関心を示されてお声が掛かったと聞いていますが、そういう経緯だったんですか?

阪田 | そうでしょうね。坂倉さんはル・コルビュジエの弟子ですが、同じ弟子でも前川さんとはずいぶん違うんです。前川さんは東京大学の工学部建築学科のご出身ですが、坂倉さんは同じ東大でも美学美術史卒ですから文科系で、直接、建築には関係ないわけです。ですから坂倉事務所の仕事内容を見ますと、多いのは民間の建築、企業の建築が圧倒的なんです。そういうところで新しい試みに挑戦している。一方、前川さんはもちろん紀伊國屋書店はやっていらっしゃいますが、公共建築が主体です。同じ東大卒でル・コルビュジエの弟子といっても、バックアップやクライアントとのつながりに大きな違いがあるんです。

古谷 | 坂倉さんは、確かに建築とはちょっと違う関心をお持ちだったような気がしますね。

阪田 | 前川さんは官とつながりが非常に強いんです、家系もそうですしね。逆に坂倉さんは全然違って、民間企業…。

古谷 | 商業とか民…、おふたりは対照的ですね。

プラットホームの下に“百貨店”を…

洒落っ気がありますね

古谷 | 坂倉さんはバリ万国博覧会のグランプリを携えて凱旋帰国するわけですが、戦時色の強い日本ではなかなか才能を発揮する機会がなかった。ようやくその才能を世に示したのは、敗戦を経た1950年の難波高島屋新館の増改築になるわけですね。そもそも難波計画は、プラットホームの下を百貨店に改造して売り場を入れる仕事で、いわゆる“正統的建築”とは正反対にある、どちらかと言えばヤクザ的と言った方が良いかもしれない仕事をお引き受けになった。その動機のようなものは、お聞きになったことはありますか?

阪田 | いや、僕自身はありません。そんな話はたぶん所員にはされないだろうと思います。坂倉さんは経団連とか、そういうつながりから言えば、非常に大きなパイプがあったんです。南海にしても東急にしても小田急にしても、いわゆる鉄道とか…。

古谷 | 鉄道とか経済界とか、そういうパイプですね。

阪田 | そう、そういうつながりのある会社がクライアントとしてあった。もちろん個人的なものもあるでしょうけど。

古谷 | 僕はそれが坂倉さんをして、他とはちょっと際立って違うものにしていました。プラットホームの下に百貨店を入れるような仕事を引き受けられるなんて、何だか洒落っ気がある気がするんです。

阪田 | 公共建築が重要…というような認識を持っている建築家はあまり考えないでしょうが、坂倉さんの場合は建築の主流は公共建築で、民間の建築はそうじゃない…なんてことは毛頭、考えていないわけです。坂倉事務所は、1951年にクラブ関東、翌年にクラブ関西の設計をしましたが、坂倉さんのクライアントは、南海、東急、小田急、塩野義製薬、出光興産、東洋レーヨンとか、このクラブのメンバーとのつながりが大きかったと思います。クラブ関東、クラブ関西の会員は一部上場の会社のトップの人たちなんです。そういう建築を最初に手掛けたというのは、その後の影響が大変大きかったですね。

古谷 | 民とはいっても、日本の経済界を牽引するような、そうそうたる民間だったわけですね。話は戻りますが、藤木さんは坂倉さんがどうしてニューブロードフロアーのようなプロジェクトに、興味を持って取り組まれたとお思いですか?

藤木 | 興味を持ったというよりも、ニューブロードフロアーのすぐ前に南海球場の改築をやられたんです。それが成功して「南海球場は入場者が増えた」という実績がはっきりと出た。南海球場もニューブロードフロアーも終戦直後ですから、坂倉さんは他に仕事がない。しかし所員がいますから経済的には仕事をしなくてはいけない。そういうコンディションがあったと思うんです。一方で、坂倉さんは支援者に恵まれたんです。その一人に高島屋の美術品を担当された川勝(堅一)さんがおられるんです。

古谷 | なるほどなるほど…。

藤木 | 1937年に坂倉さんが設計したバリ万博の日本館に展示する着物とか美術品を担当されたのが、川勝さんがおられた高島屋の美術部です。ところが、坂倉さんが「これは日本のものとして恥ずかしい、展示する必要はない」…というような事件になったらしいんです。

古谷 | 坂倉さんが隠しちゃったとか?

藤木 | そう。それで坂倉さんが選んだものだけが陳列された。これは噂ですが、まあ半分は本当らしいです。私の推測ですが、この時に川勝さんは坂倉さんと会われて縁が出来たのではないかと思います。川勝さんは陶芸の河井寛次郎の後援者としても有名で、後には高島屋の常務になられた方ですが、日本美術の解釈を巡って坂倉さんと意気投合して、強い見方になってくれたのです。坂倉さんには、この他、一高、東大、10年間の滞仏、民芸運動、思想家集団のスメラクラブとか、阪田さんもおっしゃいましたが、財界系のクラブ関西、クラブ関東などを通して多様な人脈があり、これが新宿の仕事までつながったんだと思います。

話を戻しますが、当時の大阪市民にとって、南海電鉄ホーム下のストアや一杯飲み屋はとても有効な場所だったんです。それがニューブロードフロアーになって、恨めしく思っている人もいたらしいです。

古谷 | きれいになりすぎた?

藤木 | そう、きれいになりすぎた。百貨店になったわけですから。

古谷 | 昔の状態をあんまりご覧になっていなかった。

藤木 | おそらく…。それが結果として、想像できないぐらいに大成功を収めたわけです。本館とニューブロードフロアーは半階ずれているのを大きな階段でつないでいるんですが、斬新な照明と色彩によるモダンな空間が大変な人気を呼んで、すごく売りが上がったんです。とにかくニューブロードフロアーは、その後の坂倉事務所の発展の元になった、非常に大きな作品なんです。

難波が終わって渋谷へ

実績が評価された増改築

古谷 | ニューブロードフロアーは第2期もあるんですか?

藤木 | ニューブロードフロアーの次は大規模な増改築になる南海会館です。南海会館は延べ面積4万m²近い巨大な規模で、百貨店と映画館が3層に重なる建物なんです。もともと難波高島屋本館は久野節の設計で昭和初期に建てられたんですが、その南隣への増改築で、沿線の人口が急増して、利用者が増えてリニューアルせざるを得なくなったのです。僕は坂倉事務所に入っても建築に携われず、東急文化会館の映画館パンテオンの室内パースなどを描いていたんですが、ある時「藤木君、大阪に行ってください」と坂倉さんに言われたんです。それは、南海会館のラッシュが

大阪のスタッフではとても間に合わないから手伝いにけといふことだったんです。僕と八巻(朗)さん他、東京から数名が大阪に行ったんですが、これだけの少人数であんなにかい建物をよく建てられたものだと感動しました。私はやっと、都市的…と言うと大げさですが、やや大きい仕事に携わるようになって良かったと思いましたが、徹夜の連続で、ある日は見積もり係、ある日は図面係という具合に、もう何でもやるという態勢でした。当時は計算機は手回しの…。

古谷 | タイガーですね、ガチャガチャと手で回すんですね。

藤木 | そう、当時はCADもないですから、柱だって何万本とあるわけで、それをいちいちT定規をずらして描くわけですよ。最後はゴム消しを削ってハンコをつくって押ししました。

古谷 | 四角い柱のマークで(笑)。

藤木 | そんなことでみんな鍛えられました。でも、南海会館も大成功したんです。映画が非常にピークの時代だったんですね。

古谷 | 南海会館の竣工は何年になるんですか。坂倉事務所の年表を見ますと1956年に渋谷の東急文化会館が出来ますよね。すごいものが同時に進行していたことになりますか?

藤木 | そうです、竣工は1957年です。

古谷 | 56年、57年、58年…、そうこうするうちに、新宿西口広場の設計は61年に始まりますから、少し時間はずれるかもしれませんが、難波がまとまって、渋谷がまとまって、いよいよ新宿へと向かうわけですね。新宿の話に移る前に、渋谷について少し伺いします。渋谷は独特の地形があるところだから、地下鉄が上を通ったりするようなターミナルビルの経験もなかった。資料によりますと、先ほども伺いましたが、難波高島屋新館の増改築の仕事が、五島慶太さんの目に留まった。戦後復興の著しい渋谷に、旧国鉄・地下鉄・玉川線・井の頭線・東急東横線の5線が集中するとありますと、駅空間の交通整理が必須で、さらに百貨店の増床も急務だった、と書いてあります。それが渋谷の増改築なんですね。

阪田 | そうです。旧玉電ビルに、坂倉事務所が手を入れて東急会館になるんです。旧玉電ビルは7階建ての計画で始まったビルですが、戦前の鉄鋼統制令に遭いまして3階で工事を中断していたんです。しかし将来的なことを考えて柱は屋上に突き出たままになっていた。それを1954年に、一大総合ターミナルビルに増改築したわけです。いわゆる都市的建築にリニューアルするわけですから、まずは法規制との戦いが相当なものだったと聞いています。そして東急会館の完成と同時に、坂倉さんは東急を通して渋谷のマスタープランを描いているんです。その広大な構想を関係筋に丹念に説いて回って、なかば夢のような計画を結局は実現させてしまった。坂倉さんの人徳が成せる技…というような話も聞きますけどね。実際、1956年には最上階にプラネタリウムのある東急文化会館と連絡



上ーバリ万博覧会日本館[1937] [提供: 坂倉建築研究所] | 下ークラブ関西[1952] [出典: 『建築家坂倉準三 モダニズムを生きる | 人間、都市、空間』]



上ー難波高島屋本館とニューブロードフロアーを結ぶ階段[1950] [提供: 坂倉建築研究所] | 下ー南海会館[1957] [写真: 多比良敏雄]

通路、1960年には京王ビル、1970年には渋谷駅西口ビルが、ほぼブランドおりに出来上がるんです。藤木 | 渋谷の計画は、連結された3つのビル、デッキを架けた絵とかいろいろありまして、都市計画と言われるんですけど、新宿西口広場も含めて、あれは複合的なターミナルのデザインで、これを都市計画と言ってしまうの定義が広すぎると思います。あれはアーバンデザインのひとつだと思います。渋谷の仕事で凝縮されているのは、やっぱり旧玉電ビルの増改築に尽きると思うんです。いわゆる東急会館です。これをよく分析するとやっぱり動線なんです。通勤客とか商業的な施設に来るお客さんの動線。結局、地下鉄を持ち上げて劇場をつかって、1階下りたらJRに乗り換えられるし、地上に下りれば広場がある…というように仕立てたわけですね。結局、上下の動きで“谷川の水の流る如く”乗り換える…、それに尽きるわけです。

古谷 | つまり動線になる…。

藤木 | 今、思い返すと、なるほど、という感じになります。当時の仕事は非常にリスクなものだったんです。別の言い方をすると「坂倉は改修の名人だ」という感じもあつたんです。

古谷 | えっ？ それはどうしてですか？

藤木 | 南海球場も南海会館も改築や増築でしょ。ニューブロードフロアも、大変な改築ものですからね。東急会館もそうです。東急会館は半分壊れたようなビルで、しかも、もっと低かった建物に上階をかぶせたわけですから。工学部出の建築家は、普通ならそういう仕事はやらないでしょう。さつき阪田さんもおっしゃいましたが、もっときれいな仕事がしたい。しかし、坂倉さんは、そんなことには頓着していないわけです。やっぱり美学美術史出身なんです。ある意味でサイエンスを信用しているんです。だからきちんとした構造家の力を借りればできる…。例えば、地下鉄の上に劇場を載せるなんてことは、工学部出身の人は根っから考えないわけです。でも、坂倉さんは、音響学の石井聖光さんに相談すれば解決できると信じていますし、地下鉄のビル乗り入れなんか、構造は二見秀雄さん、コンクリートは平賀謙一さん、防振は佐藤孝二さんとか、東大、東工大の俊英を動員して解決したわけです。坂倉さんは「造形的なことは自分が責任を持つ。だから技術的なことは私と一緒に責任を持ってくれ」と啖呵を切ったに違いないんです。

古谷 | 総合プロデューサーみたいなものですね。藤木 | そうだと思います。そして、その東急会館が平面的になったのが新宿なんです。古谷 | それが平面的になる？ それが新宿ですか？藤木 | 僕はそう思いますね。

古谷 | 総合プロデューサーみたいなものですね。

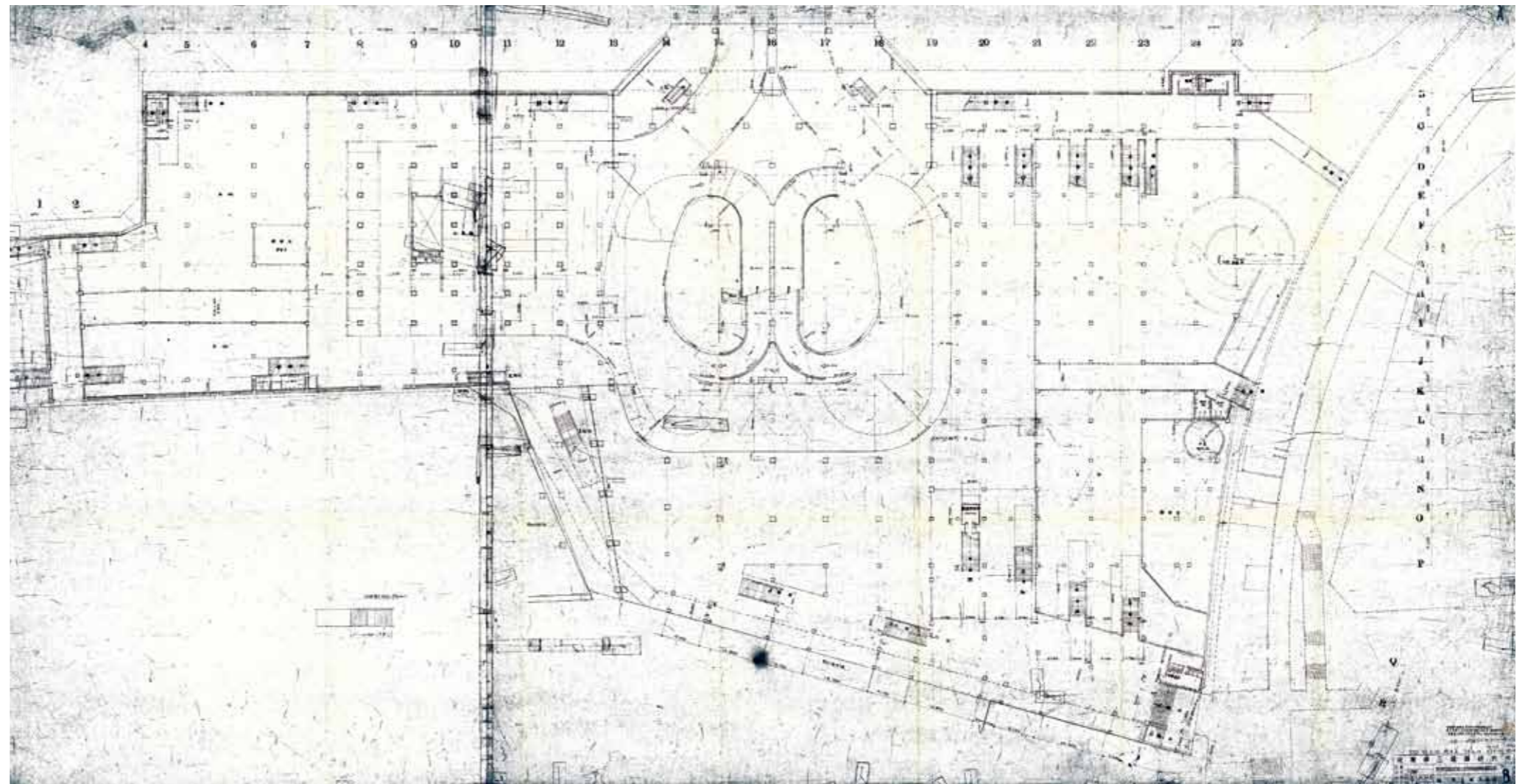
藤木 | そうだと思います。そして、その東急会館が平面的になったのが新宿なんです。

古谷 | それが平面的になる？ それが新宿ですか？

藤木 | 僕はそう思いますね。

西口は焼け野原で まさに裏口…

古谷 | いよいよ新宿のお話に入りますが、阪田さんはそれ以前に西口には行かれたことがあつたんですか？



阪田 | 初めてです。新宿は、小田急線のターミナル駅ですが、プラットフォームが貧弱だったことが印象に残っています。小振りの木柵の改札口の出口の先は、急な短い坂で、その日は雨の後で滑りそうで気になったという記憶が残っています。東口のような多数の人の利用がなかった。それが当時の新宿の西出口でした。東口は伊勢丹と三越百貨店がありまして、映画館もあつたんですが、西口は全く施設がないんですね。焼け野原状態で、まさに裏口という感じでした。

古谷 | “裏口”に降りたのは新宿西口広場の仕事のためですか？

阪田 | 坂倉事務所が小田急ビル[3]、新宿駅西口広場・地下駐車場の全体の企画調整に関与するのが1959年なんです。それで僕はそのプロジェクトの担当を坂倉さんに命じられて、西口に行きました。しばらくしてある時期からはずっと現場で、小田急の人たちと一緒にした。小田急側も、はっきり方針が決まっていた、それに基づいて設計を始めるというのではないんですが、現場でしょっちゅう会議があつたんです。チームの中で吉岡功人さんという早稲田の先輩が課長、細矢富雄さんという東大出の係長がいつも一緒にした。坂倉事務所も僕だけじゃなくて、小川(準一)君、水谷(碩之)君とか、何人かいました。そこで打ち合わせをしながら、すぐに図面を描くとか、そういう作

業を西口でやっていたんです。

古谷 | 打ち合わせする場所はどこだったんです？

阪田 | 現場小屋のような仮設の建物でした。小田急ビルの計画の時は、施工会社だった竹中工務店の仮設小屋がありました。その当時から小田急の人たちはビルだけではなくて、都市計画画面にもいろいろと関心があつたようです。

古谷 | その頃から、もっと西に伸びる副都心全体に関係する計画があつたわけですね。

阪田 | いや、副都心の構想は全然なかった…。

古谷 | でも、その出発点になるような計画があつたのでは？

阪田 | あつたのかもしれませんが、その頃、副都心構想の打ち合わせに都庁まで行くようなことは、全くなかったですね。

古谷 | そうだったんですか？

藤木 | 都としてはあつたと思いますけど。

阪田 | 私たちは知らなかった。

古谷 | オープンではなかったんですか？ でも新宿西口広場は、副都心が伸びていくための大きな動線をつくるため…のように見えます。

阪田 | 都市計画としてはあつたと思いますが、広場まで入った都市計画事業決定ではなかった。

藤木 | 新宿駅西口広場という名前は、1948年に出

来たんです。終戦後3年目です。新宿の発展を見越して西口辺りを開発しようということで、建設省の告示が出て、そこで名称が決まったんです。坂倉事務所が実施設計をやることになった時、それをジョブネームとして、そのまま踏襲した。ですから、坂倉さんが新宿駅西口広場…と命名したわけではないんです。

古谷 | なるほど、都市計画にあつた…と。

阪田 | 1948年の都市計画は、図に描いたようにはつきりしたものではなくて、都市計画区域としてあつたと思うんです。都市計画として我々がそれを見たりするようなことは、その時点ではなかったんです。

藤木 | そうそう、文書だけです。西口には淀橋浄水場があって、本当に寂しいところでした。近隣の人たちから「こんなものがあつたのでは新宿は発展できない」という署名運動が起こって、東村山に移転することになった。それが副都心計画が具体化する第一歩だったんです。今まで少なかった昼間人口が急に増えるわけですから、それで新宿駅西口が急にクローズアップされてくる。これが、この計画の最初の動機ですね。

古谷 | いわゆる人の動線の流れとか流動する規模とか、そういうことがあらかじめ坂倉さんの頭にあつたのではないかと思つたのですが、あんまり具体的な計画はないままに始まつたわけですか？

藤木 | それは坂倉さんというよりも、小田急ですね。

新宿駅西口広場及自動車駐車場建設工事
地下1階平面図【所蔵：坂倉建築研究所】
設計当時の確認申請控図（青焼き）。設計
者欄に坂倉の印が見られる。広場の土木的
スケールと周囲の建築的スケールの対比、
他に類を見ない造形がよく表れている。左
端の曲線は地下鉄丸の内線の軌跡に沿った
地下通路、下端の斜線は山手線に沿った小
田急百貨店の端部である。（地上広場もこ
このファサードに囲まれた台形状の平面形を
している）広場が周囲の地下空間に対し有
機的につながっていく様子が分かる【解説：坂
倉建築研究所 萬代恭博】



上—東急会館[1954]【提供：坂倉建築研究所】 | 下—東急文化会館[1956]【出典：『建築家坂倉準三 モダニズムを生きる | 人間、都市、空間』】

[3] 小田急ビルの正式な建物名称は、新宿駅西口本屋ビル。この建物は、隣接する地下鉄ビルと内部でつながっており、併せて小田急百貨店ともなっている



竣工時の小田急百貨店側から見た新宿西口広場中央開口部[写真：新建築社写真部] 当時はまだ副都心の超高層ビル群は建設されていなかった。昇降スロープは地下1階から、さらに下階駐車場に下る車路となっている。スロープに囲まれた広場中央は噴水を配した池であったが現在は緑地となっている。車路の機能がそのまま造形につながっていることが分かる。地上から見下ろしても地下から見上げて強い印象を残し、例え設計者の名前は知らずとも多くの市民が新宿のイメージとして記憶している空間である [解説：萬代恭博]

社長の安藤楯六さんは元は東急電鉄にいた人で、鉄道と不動産の専門家です。鉄道会社は半分は不動産屋さんですからね。

古谷 | そうですね、私鉄の場合は特に。

藤木 | 安藤さんはすごく先見の明のある人なんです。将来の発展を期して西口の土地をお買いになったわけです。沿線の土地を売るためには、ターミナルの発展も欠かせないと考えたのでしょう。それが驚くことに終戦のわずか6年後に…です。

古谷 | へえ。1951年頃。

藤木 | そう、すでに小田急は東京都に対して「新宿西口広場と地下道をつくりたい」という申請を出しているんです。そこから延々と安藤さんの構想が実現していくわけです。1958年に首都圏整備委員会が池袋と新宿と渋谷、この3つを副都心として将来の発展を考えようという大まかな方針を決めるんです。それ

に坂倉さんも関与したらいいんです。ですから坂倉さんは、2つの道を持っておられたんです。ひとつはニューブロードフロアーから東急会館へ、ずっと発展してきたデパートと私鉄業界に対する信用ですね。全部、売り上げがはっきりと上がっているわけです。「坂倉に頼めば大丈夫だ」ということになっている。もう一方では、東京都の上層部ですね。首都整備局長の諮問機関である五人委員会とか、いろんな委員になられて、行政の方からも十分な信用を得ておられたんです。その両方から出来上がったのが新宿西口広場なんです。

「こんなものを広場の真ん中につくれない…」

巨大な換気塔ビル案を一喝

古谷 | とところで、藤木さんが新宿西口広場にかかわら

藤木 | 坂倉さんが新宿西口広場に大構想を持っていたという記憶はないですが、都の換気塔の案には納得していませんでした。東京都は、「とにかく穴を開けるのは、土地が無駄になるから絶対反対、全部蓋をして地上にも駐車場を設ける。排気ガスの問題があっても、排気塔ビルを建てればいい」と言うんです。つまり、東京都首都整備局は地上レベルの中央部を駐車場、または都バス乗り場として確保したいと考えていたわけです。

古谷 | 駐車場の計画について伺いますが、最初は地上部にも駐車場をつくらうという計画のもとに換気塔計画があったと思うんですが、駐車場は基本的には地上部のもも合わせて地下に集約的に整備することになるわけですね。

藤木 | そうです。当初から東京都は地下にも公共駐車場をつくる計画だったらしいです。

古谷 | 附置義務駐車場もあるわけでしょう？

藤木 | 1960年に、ある規模以上のビルをつくるには、何㎡につき何台の駐車場を用意するという附置義務が出来て、駐車場が急にクローズアップされたんです。クラブの立体駐車場とか、海外の駐車場メーカーが日本に攻めてきたわけです。

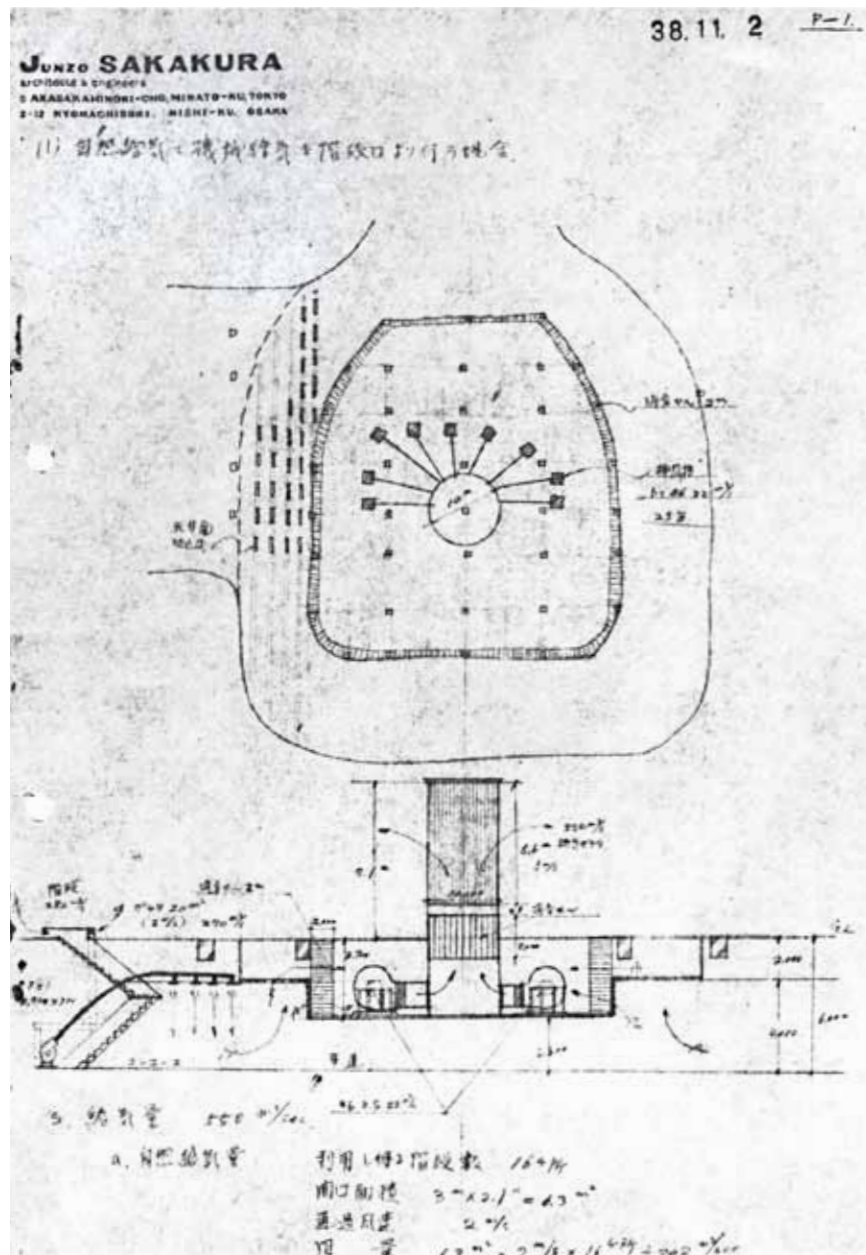
古谷 | なるほど。売り込んできた頃ですね。

藤木 | そう、それで海外の駐車場視察団が出来て、建築系の雑誌にも、その募集広告が出た時代です。地下駐車場は最初は190台でしたが、途中から附置義務が出来ましたので、420台になったんです。その後、穴開き案が具体化してくると地上の駐車場はなくなって、都バスの乗り場も減るわけですが、都の交通局からは「我々のバス乗り場をどうしてくれるんだ！バースが減るのはけしからん、穴を開けるな」と言われました。

ただ、そのうちに実際にはかなりのボリュームの換気塔ビルが必要になることが徐々に分かってきて、駐車スペースもバス乗り場もあまり取れないことになってきたんです。都の指示で小川君が描いた巨大な換気塔ビルのスケッチを坂倉さんに見せたところ、「こんなものを広場の真ん中に建てられますか!」と一喝されました。そんな時に阪田さんから「いっそ、穴を開けたら?」という意見が出まして、小田急臨時建設部の設備担当の千々波(天身)さんも賛同して、その話が坂倉さんの琴線に触れることになったんです。

古谷 | そうでしたか。大穴が話の発端にあったのではなく、巨大な換気塔が邪魔だと…。

藤木 | 坂倉さんが「穴開き案でいこう」と言い出したものですから、そこから新たな闘いが始まるんです。今からちょうど50年前です。実は、1963年の1月に臨時技術委員会が組織されるんです。メンバーは委員長の副都心建設公社理事の武富(己一郎)さんを始め、道路や土木の専門家の人たちが委員になって、どちらの案が良いかを審議して、その結果を都市計画地方審議会にかけるというかたちになっていたんです。ただ、臨時技術委員会は土木系の人たちですか？



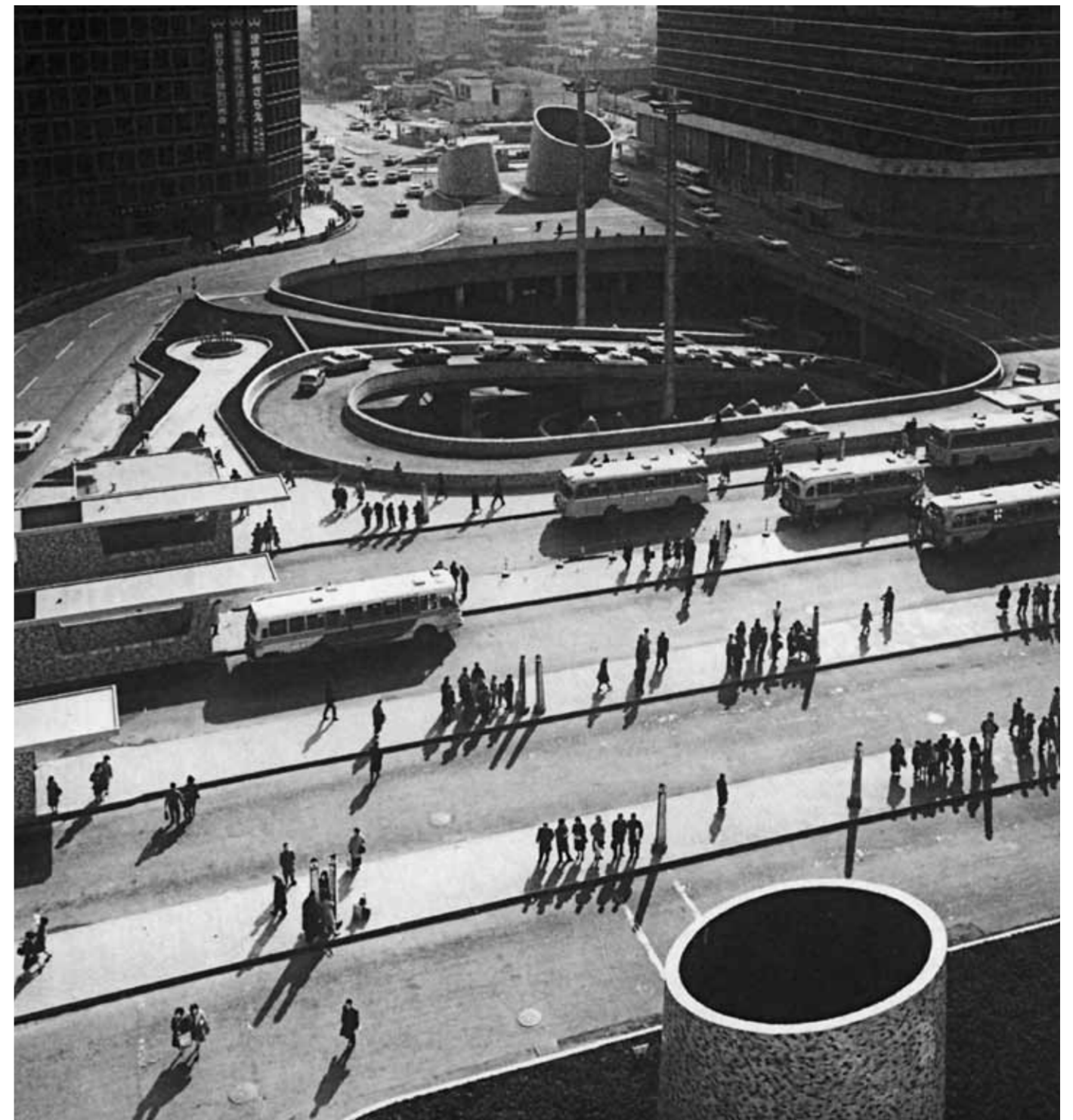
中央換気塔案 [所蔵：坂倉建築研究所]
1963年11月2日開催の新宿西口広場の換気システム検討のための臨時技術委員会の会議資料。都の指示により坂倉事務所が作成したもの。都が計画した中央換気塔案の1例(上が平面図、下が断面図)。当初、6階建てのビルほどだった換気塔の機械室部分を中階階に潜らせて、地上の広場を少しでも確保する案。この案では地下駐車場の中央部分の天井高は2.3mとなり車両の制限が必要になる。さまざまな検討を経て、結局、大開口案が実施された [解説：藤木忠善]

ら、穴を開けたらどのくらい換気されるかなんてことには詳しくないわけです。結局、同じ年の2月に、換気分科会をその下につくるんです。
古谷 | なるほど(笑)。それなら独自に…。
藤木 | その時点で「穴開き案に決まりかな」という感じがありました。換気分科会のために追加された委員は伊達英夫さんで建設省のトンネルの専門家です。それから河村竜馬さんは東大航空研究所の空気力学、航空力学の専門家です。そういう人が換気分科会を開いて模型をつくって実験することになった。ペニヤに50m角相当の穴を開けて計測用の模型をつくって、駒場にあった東大の航空研究所の風洞で実験をしたんです。西口のあの辺は、だいたい風速1mくらいは常時吹いているという仮定で、どのくらいの上昇気流が出るか…。記憶は確かではありませんが、必要とされた毎秒550m³を超える毎秒700m³くらいという結果が出たと思います。それで、親委員会である臨時技術委員会を再度開いて、換気量はOKが出たんです。
古谷 | 一つひとつ実証されたわけですね。

藤木 | そうです。次は電気代と工事費の比較です。換気塔案は多数のターボのファンが付いているんです。その電気代を計算して「これだけ儉約になる」と、工事費も安くなるという、すべて数字が出たわけです。
古谷 | いよいよ、穴開き案と換気塔案の優劣をはっきりとつけてははいけなくなりました。
藤木 | 会議の資料には全部日付が入っているんですが、日付を見ると、ケネディ大統領が暗殺されるちょっと前です。1963年11月2日と書いてありますから。この頃が、穴開き案の検討がピークだったことになりません。
とにかく、関係する多くの委員は賛成なのに、まだ穴開き案を実施することには決まっていなかったわけですから、客観的に「穴開き案の方が優れている」というデータを出さない限り、東京都の会議は通らないわけです。最後に案を決める会議が、新宿東京会館という会場で開かれました。坂倉さんは手ぶらで、僕と小川君は書類を抱えて勇んで行ったんですが、「あなた方は入れません」と。いわゆる秘密会だったんです。僕らは坂倉さんに書類を渡す暇もなく、オロオロして廊下で待っていた記憶があります、1964年の2月です。やがて扉が開き、坂倉さんが颯爽と出てきて「決まった」と言われ、ホッとしました。

穴開き案に決着。 データが証明した

古谷 | 話は戻りますが、臨時技術委員会とか、穴を開けるために、換気分科会が出来たという話がありましたが、そういう采配は結局は坂倉さんがなされていたわけですか？
藤木 | いや、それは直接には新宿副都心建設公社と東京都の都市計画部です。
古谷 | そこには坂倉さんはかかわっていなかった？
でも、結局、最終的には…。
藤木 | 坂倉さんは東京都の行政にいろんな委員として首を突っ込んでおられました。その中で一番大事なのが首都整備局長の山田正男さんという人で、東京都の都市計画に関しては、その人が首を縦に振らないと何もできないと言われていました。その山田さんが、坂倉さんと意気投合するところがあつたらしいんです。そして、「私じゃ手に負えないから、諮問機関をつくってくれ」ということで、五人委員会が出来たんです。その五人委員会というのは…。
阪田 | 建築家なんです。
藤木 | そう、建築家なんです。高山英華さんと松井達夫さんは都市計画ですね。松田軍平さんと坂倉準三さんは建築家です。山田さんを入れて5人です。ですから、坂倉さんは専門の学者を集めることを、そこで提案されたのではないのでしょうか。
古谷 | 新宿東京会館で、坂倉さんが1人で出席されて、そこで穴開き案が決まったのは？
藤木 | それは東京都の都市計画地方審議会です。最



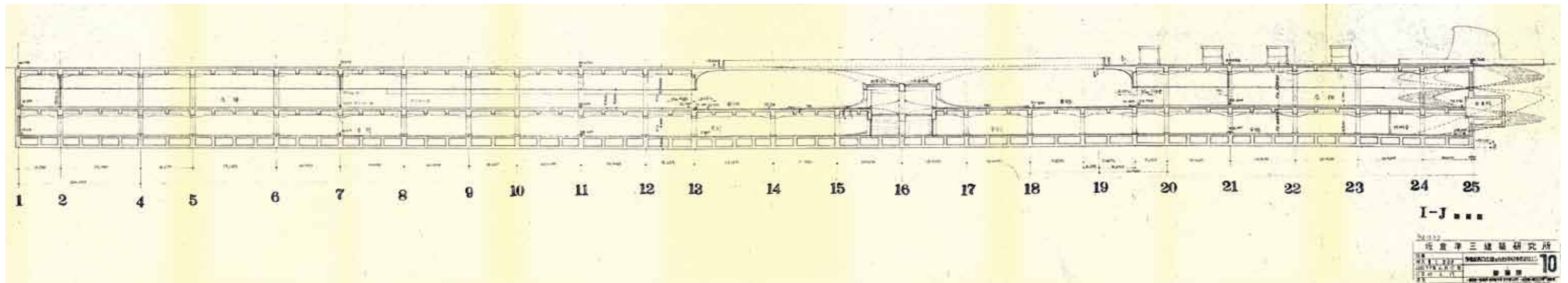
終決定は五人委員会じゃないんです…。その頃は、穴開き案の方が優れているという客観的なデータが全部揃っていませんでしたから、東京都の担当である武田宏さんも、それで良かったわけです。それから後は武田さん、鈴木信太郎さん、谷口壱(いち)さんなど、担当の首都整備局の人たちは全部、応援に回りました。その段階で僕と小川君は「お役ご免…」を申し出ました。会議、会議で、へとへとだったんです。結局、僕は5月、小川君は9月に退職しました。
古谷 | 疲労困憊された(笑)。
藤木 | そう。小川君はそのまま渡仏、パリで設計活動を始めました。僕は芸大に。ちょうど吉田五十八先生が退官されて、吉村先生が主任教授になって「藤木も

坂倉さんのところでだいぶ勉強したろうから、学校に戻ったらどうか」と言われました。その後、大阪事務所の東孝光君が急遽、東京に呼ばれ、実施段階を担当することになったんです。
古谷 | そうだったんですか。
“谷川の水の流るる如き”動線は基本設計から実施設計へ…
藤木 | 坂倉さんの優れた点というのは、もちろん基本的に“谷川の水の流るる如く…”の動線もあるんですが、そこに必ず魅力的な商業スペースをくっつけることなんです。今で言うとハイブリッドな空間ですね。

竣工時のバスバース [写真：小山孝]
当時はまだバスバースに屋根がなく、植栽も繁茂していない。換気塔は今は植物に覆われているが仕上げは当時、坂倉がよく用いた大仏タイル張りである。このタイルはやきものの窯温度によるランダムな色差を自然な風合いのデザインと捉えて多くの作品に用いられたもの [解説：萬代恭博]



現在のバスバース



新宿駅西口広場及自動車駐車場建設工事断面図[所蔵：坂倉建築研究所]
設計当時の確認申請控図(青焼き)。平面的に長大なプロポジションが広場開口のスケールの大きさをよく表している。柱列番号13-19までが大開口部分。歩行者には気付きにくい、地下2階から梁の形状で地上スロープの構造体が確認できる。右端には、地下駐車場への昇降スロープと特徴的な造形の換気塔が表現されている[解説：萬代恭博]

古谷 | なるほどそうですね。

藤木 | これはニューブロードフロアーからの経験もあると思うんですが、渋谷の東横のれん街にもそういうものがあって、乗り換えがてら買いのができる。何と言いますか、人間の良さを活かしている。それが坂倉さんの特徴なんです。

古谷 | でもやっぱり、流れに沿って歩けることは重要ですよ。その水の流れは下水道を流れる水じゃなくて、本当に自然の中の谷川の流れですよ。

藤木 | 私もそう感じています。

古谷 | 駐車場もそうですし、JRからの動線も含めて本当に官民の協力に基づいて集約的にまとめた一大事業だったと思いますね。ところで、出来上がってからの評価はどうだったんですか？ 新宿西口広場が果たした役割と言いますか。『新建築』の1967年3月号に水谷(穎介)さんがいろんなことを要約して書かれています。ここは地下街じゃない…という文章ですが、広場を“立体広場”というかたちで書かれています[4]。つくっている段階から“広場じゃなくて立体広場だ”というキーワードのようなものがあつたんですか？

藤木 | 坂倉さんは、そういうジャーナリズムで使うような言葉については、関心がないんです。

阪田 | そう、案外使わないですね。

藤木 | 技術用語もあんまり使われなかった。要するに、表立っては建築的な主義主張をしないんです。

古谷 | 水谷さんの文章には、新宿西口広場が立体広場になって、そこに新宿らしいお店も張り付いていろんな意味合いが重なり合った。駅の広場だと思う人は駅の広場、バスの乗り場だと思う人はバス乗り場、駐車場だと思う人は駐車場、商店街と思う人は商店街だと思えばいいのでは…と書いてありました。

それと同じ文章の中に、普通だったら土木屋さんの範疇の仕事だったはずのものが、地下に埋没した共同溝を採用したことによって、建築家の仕事になったと書いてありました。少し共同溝の話をお聞きます。共同溝に集約したことで道路下が自由になって、大穴が実現できた。相当、苦労されたんでしょうね。

藤木 | 今日は残念ながら都合でおられません、その辺は東君とか田中(一昭)君が一番詳しいんです。この計画では断面の有効利用上、土かぶりを取らない設計だったので、地上広場の四周の歩道下に共同溝を新設し、そこに上・下水道、ガス、電力、電話などの配管類をすべてまとめて整理して収めることにしたのです。共同溝は幅4m、深さ2mだそうです。ところがガスと電力を一緒にすることに関しては、相当、難しい問題があつたらしいです。各関係先との協議にも時間がかつたようです。

古谷 | そうでしょうね。資料にはエアーカーテンも付いていると書いてありましたね。

藤木 | そうです。中央開口部四周に付いています。これは、地上が強風の時に地下道路を走る車の排気ガスが地下広場に流れ込まないように考えた補助設備なんです、現在は使われていないようです。

古谷 | とところで設備設計は？

藤木 | 設備は桜井省吾さんの事務所でしたが、専門は建築の設備でしょう。こちらも相当、苦労されたようです。

古谷 | 土木と建築の設備ではものの考え方が違うでしょうし、単位も違いますよね。

藤木 | 「穴を開けて空気を出す」なんてことは経験がないわけですよ。坂倉事務所も東京都との方針の違いでいろいろと苦労しましたが、同じように桜井事務所も苦労しました。ありとあらゆる方法で計算していましたし、土木みたいに粗くないですから、なかなか答えが出ない。

古谷 | とにかく土木と建築の協力とか、官と民の協力とか、いろんなことがうまくいったからできたんでしょうね。

藤木 | 僕もそうだと思います。その辺の調整には東君が相当、苦労されたと思います。

古谷 | 実施設計の段階ですもんね。

藤木 | そうです。例えばサッポロビルとかスバルビル、安田生命ビルとか、直接接している建物があるんですが、基本設計では大した問題ではないわけですが、一応、描いておけばいい。ところが実施設計では、そ

れを実際につなげなければならない。みんな少しずつレベルが違うでしょうし、何かと問題があるわけです。何よりも、個々のビル管理者と打ち合わせをしながら進めなければいけない。大変な時間と労力が必要だったと思いますが、東君を始め田中君、北川(稔)君、吉村(篤一)君らが素晴らしいチームワークで、乗り切ってくれたんです。

古谷 | そういう意味でも傑出したものじゃないかと書かれている…。土木だけでやらなかったから出来上がった広場であることは間違いないわけですが、水谷さんの記事で面白いと思ったのは、協働した土木の方々が、俺たちだけじゃ“太陽と泉の広場”みたいな発想は絶対思い付かないから、やっぱり建築家は大したものだと評価されたと書かれていました。そういう感触はあつたんですか？

藤木 | やっている時はありませんね。出来た後からそう感じられたとすれば、坂倉事務所としては幸せなことだと思います。

かなり後の話になりますが、坂倉さんの言われる“谷川の水の流るる如く”という考え方が、坂倉さんが亡くなった後、南口のサザンテラス、サザンタワーと代々木の駅までいくわけです。

古谷 | そうそう、甲州街道をまたいでサザンテラスの方にまでね。

藤木 | これは坂倉さんが亡くなって、阪田さんが事務所の代表になられてから、引き継いでやられたんですけど、こういうものが出来る伏線は、新宿駅西口広場・地下駐車場と小田急ビルの計画にあるわけです。古谷 | そういことですよ。地上面でもそれがあつたし、地下街のネットワークに対しても同じようなことが言えますよね。

阪田 | 坂倉さんの逝去後の1973年頃に“大通り構想”、いわゆる小田急新宿駅南口計画を小田急に提出するんです。それはあくまで坂倉事務所側の自主的なプロポーザルだったわけですが、都市への夢を坂倉さんに捧げるようなかたちで、新宿南口の将来を真剣に考えてかたちにした。具体的には小田急新駅上部を利用して、1984年の小田急新宿ミロードの西口ビル

から甲州街道へ抜ける坂道に屋外型ショッピングモール(モザイク坂)をつくった。これでいよいよ大通り構想が見えてきたわけです。その後、駐車場附属義務規定が困縁めて付いて回るわけですが、大通り構想はついにサザンテラスをもって実現したことになるんです。

藤木 | そのビジョンまで考えに入れば、立体広場と言えると思いますけど…。

古谷 | 大きさかもしれないですが、立体広場というのが初めて実現したと思いますね。

藤木 | 確かにそうですね。

阪田 | 普通は敷地内の建築をつくれれば建築の設計ですが、都市として考えれば、人が歩く通路、車の通路、そういう空間も含めてなんですよ。建築の利便性もあるし景観の問題もある。そこに着眼してやらせてもらった。

古谷 | それは日本では特に重要なことだと思います。どうしても考えが敷地の中だけで終始しちゃいますからね。これは当事者も、役人も、受け付ける監督官庁もそうです。ところが普通の人にとっては公共空間というのは、それが全部つながりあって、ひとつのものとして見えている。坂倉さんの“水の流れ”で言えば、一遍に見えなくても、流れていく先、どういふふうにつながっているか、それも含めて公共空間ですよ。話は変わりますが、立体広場が出来上がってひとつつながりになったものが出来たことを評して、学会賞受賞の時に東京都の堀内(亨一)さんが、『建築雑誌』に「じゅうらいの線ないしは点的な都市計画から面的広がりを持ち、かつ立体的な都市計画への第一歩といえる」と書いていらつしました[5]。日本では都市計画と言いましても、せいぜい道路の計画くらいのものであったものが、新宿西口広場では面として広がって、かつそれが重層して立体化していると書かれています。これはよく表していると思いました。

藤木 | そうですね。4号線(副都心と結ぶ幹線道路)も最初は2階建てじゃなかったですからね。広場の計画が決まってから、副都心の方に行くように、急に4号線の地下をつくつたんです。ですから、このことも含め



竣工時の水と光の広場[写真：小山孝]

[4] 水谷穎介「ルポルタージュ：新宿副都心計画の一貫としての西口広場と地下駐車場」『新建築』1967.3

[5] 堀内亨一「新宿副都心開発計画における駅前広場の立体的造成」『建築雑誌』1968.10



坂倉事務所で談笑する阪田氏(中)、藤木氏(右)と古谷氏(左)

て東京都も、現在の新宿西口広場の実現のために、多くの貢献があったと思います。

古谷 | でも、東京都だけでもできないし、建設省も土木も建築もいなきゃできなかった。要するに誰が欠けてもできない。ですから、本当に相乗効果だったと思いますね。さらにそれは、今日のサザンテラスとか、以後の計画につながる原点になるような明瞭な意思みたいなものがあつた。大きな穴を開けて、立体的につながった。地下の空間もつながる、地上の空間もつながる、デッキの空間もつながる。それが結局、サザンテラスまで広がったわけです。都市はどんどん状況が変わりますね。予測不可能なほど変わる。ところが、この西口の計画には、そこを貫いた一種の物語みたいなものを感じるんです。

阪田 | たまたまそういうところに居合わせたということです。最初にこれが良い、これをやろうとしたわけではないですよ。普通のビルは敷地が決まればすぐ建物を建てれば良い。ところが、駅につながるデパートとか、多くの人が集まる立体都市、特に東京のような過密な都市では、普通の建築基準法だけでは具合が悪い。法制がそうなっているわけです。やっぱり法的な条件だけを満たせば良いだけではなくて、我々がそういうものを使って、次の計画に結び付けた。それを提案するような契機を得たということです。

古谷 | 最初に将来計画を立てて、そのとおりにきっちりやっていくのは、できそうだけど実際にはできない、どんどん変化していきますよね。その時には、今おっしゃったように受け継いで、その時の時代に合わせて提案していくのは、次の後継者が現れないとできないわけですね。

阪田 | 建築の役割は、敷地の所有者が自分の企業のために建てるだけではないですね。坂倉事務所もひとりの建築家というよりは、坂倉さんを含めてそういうことに着眼して実際の体験を通じて、それを軸に新たな建築をつくっていく。かなり大きな商業建築を始め東急とか小田急とか、小さい建物では、ピラシリーズなんかもそういうところがあるわけです。

古谷 | なるほど。坂倉さんは「我々は長い歴史の中

のダリレー競技の中のランナーだ。受け渡していかなくゃいけない」…というようなことを、いつもおっしゃっていたと伺ったんですが、まさにそういうことですね。

阪田 | そういことだと、僕自身は感じています。

最後にひと言 今後の課題は…

古谷 | 今、奇しくも渋谷も具体的に大きな再開発の計画が動き始めていますし、新宿もいずれ副都心を含めて、超高層街を含めた再生計画が大きなテーマになりつつあると思うんです。お二方から見て、今後、将来こういうことを期待したい、こういうことを考えてほしい、というようなご意見がありましたらお聞かせください。渋谷、新宿に限りませんが、この種の空間に関して…。

阪田 | ヨーロッパの都市を見ますと、利便性だけではなく、長い歴史の中で時間を経過した魅力がずっと受け継がれています。日本は大急ぎで機能を充実させ、それだけでは足りなくてネオンなんかが出てきました。ネオンは不要なものだと一時的に決めつけられないでしょうが、都市景観の美しさからは良い方が良いのは明確です。建築本来の姿として、広告など建築の美観を妨げる夾雑物の類いは、排除されるべき対象であると人々が理解するか、ネオンや広告がさらに美しくなり得るか？ 建築だけの視点ではなくて、空間とか環境、そういう視点でどう考えていくか、そういうことが、大きな課題になってくるのではないかと思います。

古谷 | 建築だけで考えないということですね。

阪田 | そうですね。例えばミッドタウンにしても、こんなに過密ではなく、もうちょっと歩くスペースがあつたら、もっと良いかもしれないと思うんです。そういうように、建築だけじゃないところに移っていけば、建築もおのずと次の課題が出てくると思いますが、今は土地が地割になっていて、それぞれが勝手につくっている。そういう中では建築だけで考えても新しい建築を見出すのは難しいですね。かなり建築そのものが整備されていますし、実際使ってみると、都心には不便なところや危険なところがいっぱいある。だけど僕たちがやってきた最初のプランの状態からは、ずいぶん都市空間が変わってきています。坂倉事務所の周辺だけを見ても、ずいぶん変わりました。今はミッドタウンに接していますが、それまでは道路沿いは高い塀で囲まれていて中が見えなかったですから…。

古谷 | そうそう、自衛隊の塀でしたね、前は。

阪田 | ここだけ見ても、明らかに変わってきているわけです。

古谷 | そうですね。では、藤木さんも最後にひと言お願いします。

藤木 | 新宿西口広場とか小田急ビルに例をとりますと、1959年に三者協定が出来るんです。この頃から坂倉事務所は、小田急の駅ビルや西口の計画に関与していましたが、この協定が企業の共同体制の始まり

なんです。旧国鉄と小田急電鉄と京王電鉄です。

古谷 | 新宿駅改良に関する覚え書きですね。

藤木 | それから1961年に今度は帝都高速度交通営団(地下鉄)を加えて四者協定が出来るんです。こういうものが、西口全体を坂倉事務所が建築的にちゃんと計画する上で非常に役立っているんですが、結局はそういう大きな企業体が共同することを、先に宣言してくれたわけです。それがなければできなかった。新宿でも、例えば南口に高島屋が出来ましたけど、少し総合性に欠けているように思います。日本の都市計画は巨大なカオスみたいなもので、その時々のおもしろさはあると思います。それはそれでいい…という気がしますし、今はそれ以上のものを望める状態でもないですね。西口の範囲で言いますと、やっぱり東京都が終戦直後から準備した副都心構想というものがあつたわけです。それとビッグな企業体が共同して、そこへ坂倉事務所が協力した。そういう体制というのが、なかなか今はできにくい状態だと思うんです。もう一つは、日本は歴史がないんですね。例えば、京都を再開発するというような話にはならないでしょう。京都のようにはっきりとした歴史的まち並みがないと“何でもあり”になってしまうわけです。阪田さんが保存に尽力された六本木の国際文化会館も、日米の財閥が残してくれた庭園と建築を我々が利用できるようなかたちで残したから意味があるわけですが、歴史を重んじない人がやればなくなっちゃうかもしれないんです。やっぱり、やってはいけないことがないとダメだと思います。古谷 | 分かりました。でも、われわれはそういう動的な変化に対峙して行かなくてはなりません。

藤木 | 阪田さんから話が出ましたが、坂倉事務所の目の前に出来たミッドタウンも、陸軍の時代から、やっと自由になった産物ですね。その自由の使い方が果たして、これで良かったのかという疑問が残ります。六本木ヒルズとか、サントリーホールのあるアークヒルズ、ああいうように企業体が“点”のごとくつくっていく建築も良いと思うんです。しかし、そういうものに期待するしかないのか…という気持ちも少しはあります。将来へのビジョンを持った資本家が優れた建築家、優れた行政と協同すれば…という望みは捨ててはいないんです。

古谷 | ありがとうございます。新宿西口広場というと、あまりに身近すぎるし、“作品”として捉えるのが難しいものでしたが、今日のお話で、それを生み出すまでの、ダイナミックな力のようなものを知ることができました。

[収録：2013年11月27日]

[取材協力]坂倉建築研究所/松岡セントラルビル

ざかた・せいぞう——建築家/1928年生まれ。1951年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同年、坂倉準三建築研究所入所。1969年、西澤文隆と(株)坂倉建築研究所設立、取締役東京事務所長に就任。1985年、代表取締役。1993-99年、明治大学理工学部教授。1999-2012年、坂倉建築研究所最高顧問。
主な作品：羽鳥市庁舎[1959]、新宿駅西口本屋ビル・小田急百貨店[1967]、小田急御殿場ファミリアランド[1974]、群馬県立女子大学[1982]、新宿ワシントンホテル・新宿三井ビル2号館[1983]、大磯町郷土資料館[1988]、東京サレジオ学園[1989]、北沢タウンホール[1990]、日立シビックセンター[1990]、桐生市市民文化会館[1997]、大塚国際美術館[1998]、小田急サザンタワー・新宿サザンテラス[1998]、聖イグナチオ教会[1999]、鹿児島カテドラル ザビエル記念聖堂[1999]、JRセントラルタワーズ[2000]など。

ふじき・ただよし——建築家・東京芸術大学名誉教授/1933年生まれ。1956年、東京芸術大学美術学部建築科卒業。坂倉準三建築研究所において設計監理(国立西洋美術館、白馬東急ホテル、新宿駅西口広場・地下駐車場、札幌パークホテルなど)に従事。1964年、東京芸術大学講師、助教授を経て、1986-2001年、同大学教授。1985年、コロラド大学客員教授(フルブライト交換教授)。2007年、日本建築家協会名誉会員。BCS賞、中部建築賞、日事連建築賞、BELCA賞審査員などを歴任。

主な作品：すまい/サニー・ボックス[1963]、東京都上野動物園象舎(共同設計)[1967]、300立方メートルの家[1970]、アルペンポスト[1976]、すまい/マウンテン・ボックス[1996]など。
主な著書：『現代建築』[保育社/1965]、『大きな声—建築家坂倉準三の生涯』[共編著、鹿島出版会/1975]、『子どものための野外活動施設』[共著、鹿島出版会/1978]、『中門造の美』[歴史春秋社/1984]、『ル・コルビュジェの国立西洋美術館』[鹿島出版会/2011]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授/1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。

主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラス」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶯庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシヤ滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 建築を超えた大きな空間に、 よどみのない人々の流れをそそぐ

新宿西口といえば、僕たちの世代で言うところの学生運動の盛んな時期の「ここは通路です! ここに立ち止まらないでください!」を思い出す。でも、本来この計画は“広場”をつくることだった。また、通った都立青山高校の校舎からは、日に日に建ち上がっていく京王プラザホテルが見えたり、その後の早稲田大学時代にも、次々に西新宿の超高層ビル群が成長していった。西口はいわばその玄関口。昼に夜に何度となく通った場所である。

それほど身近で日常的な空間であつたがためか、これを1個の作品として、建築家の哲学の発露として、もう一度見直せたのは大きな喜びだった。また、完成までの経緯をよく知るおふたりのお話をゆっくりと伺えたのも大変幸いである。特に藤木さんには、新宿西口にまつわる克明な記録や、整理された貴重な資料を披露していただき、とてもありがたかった。

当時の警察が「通路だ」と強弁したのも、坂倉さんの「谷川の水の流れる如く…」の一節を反芻してみると、今思えばまんざらの外れでもなかったのかもしれない。また、その流動的な空間のルーツがバリエーション万博日本館にまで遡るものであつたことは、改めて興味深く感じるところだ。またこの計画の実現のために、坂倉さんが民間ばかりでなく、都や国の側にも立って合意の形成を図り、官民が相乗性を発揮してこの他に類例を見ない画期的な都市デザインを生み出したことは、余人を持って代えられぬ“人物”の存在が必要なることを物語る。阪田さんの回想するその人物像には、財界、官界、芸術界を広く逍遙する洒落な坂倉さんの姿が浮かんでくる。近代化へ向かう戦後の世の中に、建築家が自ら貢献しようとする姿だったとも言えよう。新宿西口広場竣工後、すでに半世紀が経過し、難波ではニューブロードフロアーが姿を変え、南海会館もすでに2019年完成の超高層複合ビルを目指して、取り壊しの準備段階と聞く。渋谷でも東急文化会館はヒカリエとなり、東急会館も地下鉄やJRなどによる再開発が動き出すなど、坂倉事務所の戦後各地での仕事も昭和期の役割を終え、歴史の1頁に組み込まれようとしている。改めて当時を振り返ることも意義深いと考える。

東京芸大に着任する藤木さんの後を受けて、当時大阪から呼ばれ実施設計に携わった東孝光さんのお話が、今回伺えていないのが心残りだが、別の機会に行った東さんとのインタビュー(『INAX REPORT』No.189)に、その頃のいきさつが述べられているので、ぜひ併せてそちらもご覧ください。

画家・デザイナー、 葵・フーバーさんの巻

Aoi Huber Kono

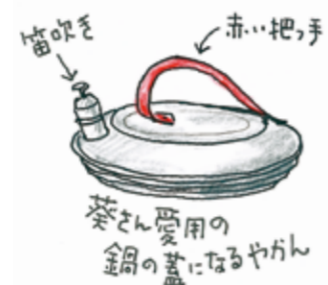
中村好文：文、イラスト、写真
Yoshifumi Nakamura

『ABITARE』

20代後半から30代前半にかけて私が働いていた設計事務所には、スタッフのためのキッチン付きの食堂がありました。3階建ての最上階にあったその食堂は、南向きの陽当たりの良い部屋で、窓際には居心地の良いソファが作り付けてありました。また、嬉しいことに、ソファの脇には本棚が作り付けられていて、毎月届く外国の建築雑誌とそのバックナンバーがズラリと並んでいました。働きはじめたころ、昼食を食べた後、このソファに座って雑誌のバックナンバーを眺めるのが、私のとおきの楽しみでした。

そのとき、私が好んで眺めたのが、『ABITARE』というイタリアの雑誌のバックナンバーです。あるとき、なにげなくページをめくっていた私は、スイスの民家を改修した素晴らしく居心地の良さそうな住まいの載ったページに目を奪われました。そして写真を眺め、キャプションを拾い読みすることで、その住まいがミラノで活躍している有名なグラフィックデザイナーのマックス・フーバーさんと、日本人の奥さまで画家の、葵・フーバーさんの住まいと仕事場であることを知りました。

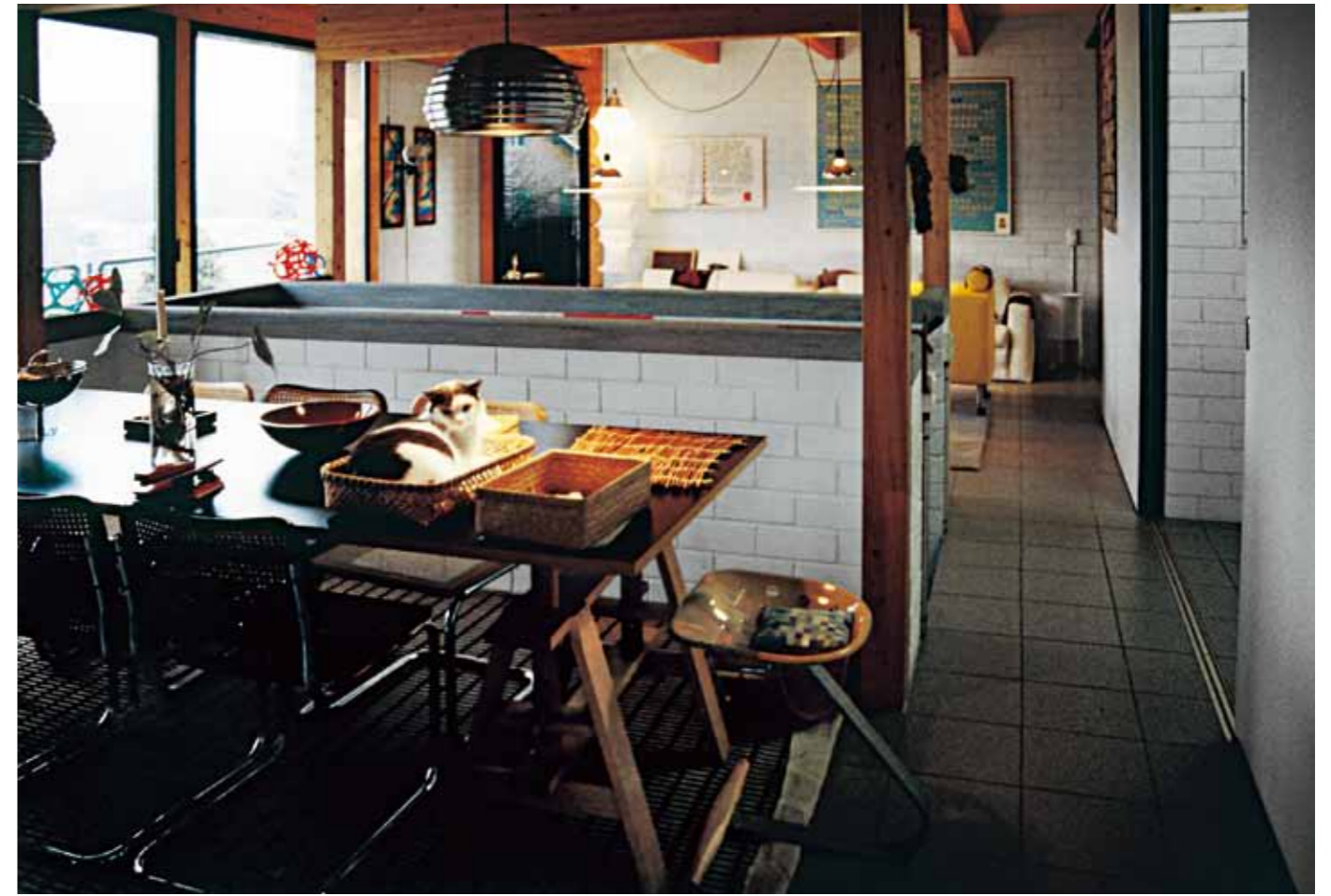
おふたりの住まいは伝統的な民家の基本的な構造や間取りに大幅な改造を加えず、民家のスケール感と雰囲気を生かし、空間の魅力を最大限引き出すことを主眼にした改修のように見受



1983年8月、2度目にサンニョー村を訪れた折に撮影したフーバー夫妻の住まい。イタリア方面に向かって下がるゆるやかな南斜面に建っている



上と同じとき、葡萄棚の下での昼食。赤シャツの男性がマックス・フーバーさん、横縞のシャツが葵さん。手前左は妻、右は友人



上一手前は食堂、半地下に降りる階段室を挟んで奥は居間。猫好きの葵さんの住まいにはいつも猫が我が物顔で同居している | 下一玄関に入って右手にある南向きの広々としたアトリエ。この空間にいると「色」という名の「音」の音楽に浸っているような気分になる

けられました。雑誌のページからは、暗くて使い勝手も悪い民家でも、住み手のセンスと住まい方によって、目を見張るような魅力的な住宅に生まれ変わっている感じが、ひしひしと伝わってきました。しかも、大がかりな工事をした様子が窺えないことも、私には好ましく思えました。

設計事務所にいた4年間、私は繰り返しこのページを開いては眺めました、「いつか、この民家を訪ねてみたい! この民家に住んでいるおふたりに会いたい!」という想いはページを開くたびに熱く胸を焦がしました。

サンニョー村

事務所を辞めて独立した1981年、フーバー夫妻と親交のあった建築家からおふたりの住所を教えてもらい、ダメモトで見学依頼の手紙を出しました。すると、驚いたことにわずか一週間ほどで、葵さんから「どうぞ遊びに来て下さい。せっかくなので、ぜひ泊まって行って下さい」という嬉しい返事が届きました。私は、その手紙を胸に押し抱くようにしてヨーロッパに旅立ちました。

おふたりの住む南スイスにあるサンニョー村に着いたのは3月26日、うららかに晴れ上がった早春のお昼過ぎのことでした。山の中腹にあるサンニョー村はスイスといってもイタリアとの国境の町まで車ならわずか20分ほどの距離で、ミラノも通勤圏です。でも、そんな位置関係を忘れさせるほど、村にはスイスの田舎の雰囲気と風景が残っていました。

おふたりの住まいは、思っていたとおり陽当たりの良い村の中にしっくり溶け込んでいました。民家を改修した住まいとアトリエの素晴らしさは、雑誌で想像していた以上でした。マックスさんのグラフィック・デザインも、葵さんの描く絵やイラストレーションも、鮮やかな色とその洗練された配色に特徴がありますが、それらの作品が家の中のそこそこに飾られていて、明るく華やいだ祝祭的な雰囲気を作り出していました。そして、それらの作品と響き合い、美しいハーモニーを奏できるように、新旧様々な家具調度や色とりどりの日用雑貨が家中にばらまかれていました。

笑顔

それから10年ほど経ち、おふたりは山を降りて平地に平屋の家を建てて住むことにしました。サンニョー村は坂道や階段が多



近所のイタリアンレストランでのランチのひとこま。葵さんはこのレストランのメニューもデザインしている

いことと、お住まいにも階段があることが、マックスさんには少々負担になってきたのだと思います。このとき、葵さんから私に「新築するアトリエ付きの住宅の設計を依頼したい」という、ありがたいお話がありましたが、スイスの建築法規がややこしいことや、建築家の資格登録のことなどがあり、残念ながらこの話は流れてしまいました。

その後しばらくの間、スイスにおふたりをお訪ねする機会はありませんでしたが、日本に帰国したおふたりが我が家に遊びに来てくれたり、手紙のやりとりをしたり、お付き合いはずっと続いていました。そして、新しい住まいとアトリエが完成して半年ほどして、マックス・フーバーさんが73歳でお亡くなりになりました。バリアフリーにした広々としたお住まいにほんの短い期間しか住めなかったことは、マックスさんにとってどんなに残念だったでしょう。明るく気持ちの良いアトリエは主を失ってしまいました。

生活の芸術

さて、今回の訪問先は、その葵・フーバーさんのアトリエ付きの住まいです。ここには1994年に最初にお訪ねして以来、これまでに何回かお邪魔していますが、今年(2013年)は晩夏の訪問になりました。ミラノ駅から高速バスでキアツォ駅に着いた私たち(今回は妻と友人も同行していました)を葵さんがトレードマークの真っ赤な車で迎えに来てくれました。ちょうどお昼どきだったのでレストランに入り、2年ぶりぐらいの再会を祝して乾杯。久しぶりに会う葵さんはお元気で、変わらない仕事と話しぶり、そして、あの楽しそうな笑い声も健在です。その笑顔に、一瞬、30数年前に初めて会ったときの少女のような笑顔がフラッシュバックのように重なりました。

葵さんの住まいとアトリエは、キアツォの町の郊外にあります。近所に新しい家が建ちはじめてはいますが、あたりはまだ葡萄畑の広がるのどかな田園風景です。少し下り坂になっている葵さん宅への私道をゆるやかに下っていきますと、白い外壁に平屋根を載せた建物が、忠実な飼い犬のように出迎えてくれました。平屋のせいもありますが、大げさな身振りの少しもないシンプルで清楚な建物。玄関前はフラットルーフに覆われたカーポートで、2台の車が駐車できます。雨や雪の日に、大きな作品を出し入れするとき、この覆われたカーポートは大活躍しているにちがいません。大きく覆うことで暗くなるのを嫌って、玄関のドアの上部にはちゃんと天窓が設けられていました。この天窓もそうですが、この建物には必要なものが、必要なところに、さりげなく設けられています。あまりにもさりげないので、もしかしたら、何度も泊めてもらいながら、私の気づいていない建築的な工夫が他にもあるにちがいません。

その「さりげなさ」は、^{プラン}間取りについても言えます。この家は、わざわざ平面図を見るまでもなく、この家に足を踏み入れ、ひとあたり巡り歩いたことのある人なら、簡単な平面図が描けるほど簡素で

明快な^{プラン}間取りです。そして、じつはこの^{プラン}間取りが、この建物の特徴であり、見どころなのです。「簡素と明快」は構造や工法にも及んでいて(あるいは構造・工法の明快さがプランに及んでいると言っても良いかも知れません)建物全体が綺麗に割り切れているような、一種の「風通しの良さ」があります。そしてその構成の主軸となっているのが、玄関ドアを入るといきなり左右に横一文字に伸びる広々とした中廊下です。1.8メートル幅のこの廊下は作品を飾るギャラリーにもなっていて、小美術館的な愉しさも味わえます。それだけではなく、玄関ドアの正面はその廊下が膨らんでゆったりしたホールになっています。さらにそのホールに連続して外部には中庭が広がっていて、いっそう広々とした雰囲気が生まれています。

明快な^{プラン}間取りの妙味は図面を眺めて味わっていただくとして、ここで特筆しておきたいのは、非常に理詰めに設計された建築的な建物を、葵さんが完全に自分のセンスで住みこなしていることです。葵さんのセンスと書きましたが、ここにはマックス・フーバーさんの気配もはつきり感じられます。この建物の空気の中に今もマックスさんはしっかり生き続けているのです。

先ほど私は「マックスさんのグラフィック・デザインも、葵さんの描く絵も、鮮やかな色とその洗練された配色に特徴がある」と書きましたが、鮮やかな色は見事な配色効果とともに家中にばらまかれています。壁にピンナップされたメモも、仕事机の上に並べられた画材や文房具(既製品のティッシュ・ペーパーの箱の柄まで!)もそれ自体が作品なのです。仕事の道具だけではなく家具も、照明器具も、台所用品も、生活雑貨のあれこれも、椅子の張り地やタオルやシーツなどのファブリックも、色と形の美しいものだけが選ばれ、家の中の要所に、なにげなく、それでいて巧みに配されることによって、家全体がまるごとひとつの作品に昇華しているのです。

1994年、初めてここを訪れたとき、サンニョー村の民家にあった空気がそっくりそのまま引越してきていると思いましたが、今回の訪問でもそのことを強く感じました。

伝統的な民家から現代的な建築に容れものも変わっても、好きな色と好きなモノたちに囲まれて、愉しく仕事し、慈しみながら日々を暮らす、という中身は少しも変わっていません。

アーティストの暮らしが制作活動と分かちがたく溶け合って、「生活の芸術」というもうひとつの別の作品を作り出している好例…とご紹介したら、読者にもこの住宅兼仕事場の持っている朗らかな雰囲気を伝えることができるかも知れません。

なかもら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクステルジ/2013]など。



左—白壁にフラットルーフを載せた建物はひっそりとも静かなたたずまい | 右—中廊下の突き当たりにある竹林の庭には、立方体を斜めに立てたようなマックス・フーバーさんの石碑(お墓)がある



建物を東西に貫く幅広の中廊下。作品を飾るギャラリーになっている。突き当たり正面に石碑が設置された竹林がある



アトリエの机の上。色とりどりの画材や文房具が整然かつ美しく配置されていて、この机そのものが葵さんの作品になっている



マグネットボードに貼られた絵はがき、写真、スケッチ、メモなど。マグネットの色も利いています

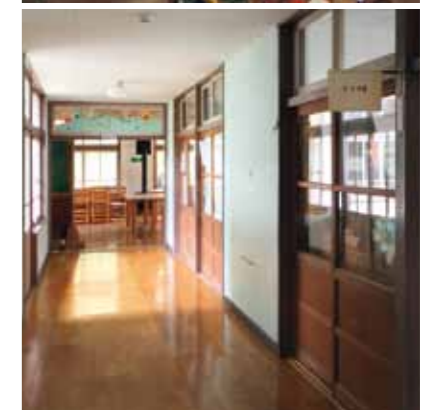
地元力を発掘する コミュニティデザインの まちづくり

1960-70年代、アメリカでニュータウン開発に伴い、住民同士のつながりを活性化させる方法として考案されたコミュニティデザイン。同時に、地域の非営利民間組織による公共サービスに準じるまちづくり活動が盛んになった。日本でも、1980年代から地域住民をまちづくりに積極的に参加させる仕組みづくりが各地で試みられてきた。特にバブル崩壊後は、経済の停滞と少子高齢化による社会問題が目立つ中で、ハードからソフトへ、デザインからマネジメントへとまちづくりの重心が変化し、地元力で地域を活性化させる新しい動きが話題を集めている。

本特集では、コミュニティデザインを実践してきた専門家に、住民参加の歴史と、これからのまちづくりに必要なコミュニティデザインとは何かを聞いた。また事例編では、住民が主体となって再生している地域の具体例を紹介する。



海士町の集落支援員が運営する「古道具屋さん」：閉園後の保育園を利用した交流施設・あまマーレ内に、集落支援員が14ある地区から出た不用品を破棄せず循環させようと開いたリサイクル店。集落支援員は正規3人の他、非常勤5人で地区の活性化を支援していて、ほとんどが1・Uターンの若者。ここでの経験を自分の地元で活かしたいという人もいる



上—懐かしいデザインの食器類が並ぶ古道具屋さん | 下—あまマーレ内観

【特記のない写真は、シヨバラタク】

日本型住民参加のまちづくりの原流 地域を学ぶことの大切さ

木下 勇

Isami Kinoshita
千葉大学大学院園芸学研究科教授

戦後の民主化政策で始まった生活改善 運動に萌芽した“ワークショップ”

戦後、これまでの日本型国家統制を町村単位まで解体し、アメリカ型のデモクラシーを普及すべく農村民主化改革が行われました。なかでも各地につくられた公民館は、地域の問題を自分たちで解決するという自主学習の拠点として発展していきました。

1948年の「農業改良助長法」によって、農村における農業改良、生活改善、青少年育成の3つの事業が行われ、この事業を推進する県職員として生活改良普及員が登場します。普及員の多くは女性でしたが「考える農民の育成」をスローガンに、民主化教育の啓蒙を担いました。農村の実態調査をする過程で、“グループの育成”や“課題解決思考法”などの普及手法を生み出していったと言われます。普及員は、1960年頃から研修として、6・6方式[1]やバスセッション[2]など、ファシリテーターとして必要な“ワークショップ”（この頃すでにワークショップという言葉を使っていた）の手法を学んでいたようです。例えば住

成されたとして、やがてその役割は縮小されていきました。

わが国のワークショップの記念碑とな った山形県飯豊町の取り組み

私が学んだ東京工業大学の青木志郎教授は、住民主体の村づくりの第一人者でした。当時、研究室には助手の藤本信義さんがいて、1979年頃、アメリカの環境デザイナーのローレンス・ハルプリン、ジム・バーンズらによって書かれた、後にワークショップの教本となる「Taking Part」[3]を翻訳しながらゼミで勉強会をしていました。

1980年に、青木先生と藤本さんは山形県飯豊町で、土地利用計画に住民参加を実践しました。まず事前に地域の情報や資料を収集し、町当局とも打ち合わせを重ね、町民各層からなる通称「120人委員会」という代議制によるまちづくりの組織を立ち上げたのです。それに学者グループの専門委員会が協力し、4年間の作業を経て飯豊町の総合計画「手づくりのまち・いいで」を策定。そこには「住民の手による住みよい地域社会の創造」が基本方針の3つ柱のひとつとして掲げられています。

さらに、新庁舎が移転する予定の樺地区を対象に、土地利用計画のためのワークショップが導入されました。具体的には、区画整理をしていない水田、用水が不足している地帯、排水が悪い地帯、幅が狭い農道、土砂崩れ・落石の危険がある所、花見をするのに良い所など、細かい点検項目を用意し、地図に印を付けていく。参加した人たちは、「これほど真剣に地域を考えたことはなかった」、「新しい庁舎が将来どう活かされるか見届けたい」など、地域への関心が高まりました。こうした「生活環境点検地図づくり」をきっかけに、その後10年の歳月をかけて、住民が一筆一筆の地権者を訪ね歩き、彼らの意向を聞いて色塗りをした土地利用計画を作成しました。これは全国にも例のないことです。その後、策定された第三次総合計画には、この土地利用計画が色

濃く反映されました。

この飯豊町の経験は、その後、長野県塩尻市や高森町、新潟県小国町などへ普及し、さらには国の事業に取り入れられていきます。1997年の旧・国土庁（現・国土交通省）の「土地利用調整システム総合推進事業」には、飯豊町の例を参考に掲げ、住民参加による土地利用調整基本計画作成の手順が記載されています。

日本型ワークショップの模索

1980年から始まった地区計画[4]では、ドイツの参加型協議会の仕組み「まちづくり協議会」方式が採用されました。東京都下で導入モデル事業に世田谷太子堂二・三丁目地区があります。ここは密集市街地の中でも、特に防災面で危険度が高い地区でした。しかし理想とは違い、「まちづくり協議会」はよくある新旧住民の対立の場となり、思うような展開になりませんでした。私は遊び場づくりの支援でその地区に住んでいたことから、ワークショップや「点検地図づくり」の応用として「三世代遊び場マップ」を仲間と考え出しました。町会長を始め長老の子ども時代の話聞きながら、どこでどんな遊びをしたかを地図に落とし込んでいく。この作業で新旧住民の壁を越えることができました。子どもと一緒に大人も楽しめ、子どもも大人に話を聞いてもらえると意欲が増すことが分かりました。こうした活動を通して日本型ワークショップのスタイルが模索されていきました。

社会関係資本の再構築

ジャン・ボードリヤールが著書『消費社会の神話と構造』（今村仁司・塚原史訳[紀伊國屋書店／1995]）の中で「モノの使用価値以上に価値を持つ記号」の出現を予言し、まさに記号の消費に明け暮れる時代を迎えました。今の子どもたちはLINEで常につながっていないと不安になるなど、体験としての人のつながりよりも、言葉によるコミュニケーション

に特化し、言葉という記号を消費しているかのようです。体を動かしながら共同作業する機会が減る中で、近年再び注目されているのが“社会関係資本”です。ソーシャルキャピタルをそう訳していますが、東日本大震災後に盛んに語られた“絆”のことで、地域にもともとあった協働による助け合いを指します。戦後の都市化の中で、地域社会を国家が税金で支援するシステムに変えていきましたが、それらはすでに破綻しかけています。かつて地域内の人間関係で処理してきた助け合いを再び社会化することが求められているのです。いつ何時来るか分からない南海トラフ地震に備えて、いやがおうでも地域のコミュニティを強化しなければなりません。では“社会関係資本”をどう再構築していくか、それは教育だと考えます。日本では江戸時代から、寺子屋を始め幕末の緒方洪庵の適塾や、吉田松陰の松下村塾などの私塾が盛んで、農村も旅人を受け入れてさまざまな情報を得るなど、もともと学ぶ意欲の強い民族です。まちづくりにおけるワークショップは、一方通行の講義とは違い、グループの中で相互に学び合うことに主眼が置かれています。さまざまな人の立場を理解して、視野を広げて共有化するという根源的な学びの豊かさを、地域に取り戻すきっかけになるはずで

オープンスペースを 豊かなものにするの大切さ

欧米の都市に比べて日本のオープンスペースはなぜか生き活きたものになっていません。高層化で生まれた公開空地には死んだような空間が幾つもあります。オープンスペースを再び人々が滞留できる豊かな空間にしなければいけません。

建築家のルイス・カーンは貧しい家庭環境で育ちますが、近所の人たちが彼の絵の才能を見出したことで、美術大学へと進学します。カーンは、道路は車のためだけにあるのではない。あまり車の通らない道路は人間のために解放すべきだと、近隣コミュニティが醸成される空間の重要性を説きました。また、アメリカの女性ジャーナリスト、ジェイン・ジェイコブズ[5]が、ニューヨークのダウンタウンで計画された大規模再開発に異議申し立てをし、子どもたちが安心して遊べる街路環境を取り戻す闘いをしたことは有名です。人が家から外に出て井戸端会議のように社会化する場所を、今後いかに再構築するかです。

ワークショップは一手法にすぎませんが、問題をシェアし、みんなで知恵を出し合っ

- [1] 6・6方式：6人ずつの班構成で、制限時間6分で、班ごとに競い合って小題について意見をまとめる方法
[2] バスセッション：6人前後のグループを幾つかつくり、そのグループの中でリーダーと記録係を決め、テーマについて意見を述べ合い、最終的にグループの意見をまとめて発表する
[3] 「Taking Part」：日本では「集団による創造性の開発ーテイキング・パート」と題されプレック研究所の杉尾伸太郎、邦江夫妻による翻訳で牧野出版から1989年に出版された。著者のローレンス・ハルプリンはアメリカ合衆国の環境デザイナー、ランドスケープ・アーキテクト。1960年代から、今日のワークショップをデザイン教育、住民の体験をもとにする市民協働まちづくりの分野へ取り入れるといった手法も実践した
[4] 地区計画：住民の合意に基づいて、それぞれの地区の特性にふさわしいまちづくりを誘導するための計画。地区計画制度は、ドイツのBプラン（地区詳細計画）制度などを参考に、1980年の都市計画法および建築基準法の改正により創設された
[5] ジェイン・ジェイコブズ：アメリカ合衆国の女性ノンフィクション作家・ジャーナリスト。郊外都市開発などを論じ、都心の荒廃を告発した運動家でもある。1961年に著した「アメリカ大都市の死と生」は反響を呼び、都市計画のバイブルと言われた。日本では1969年に黒川紀章訳で抄訳本が、2010年に山形浩生訳で訳本が鹿島出版会から刊行された

きのした・いさみ——千葉大学大学院園芸学研究科教授／1954生まれ。東京工業大学で建築を学び、1979-80年、スイス連邦工科大学留学。1984年、東京工業大学大学院博士後期課程修了。遊び場のテーマで工学博士の学位を取得。大学院時代より、子どもの遊びと街研究会を主宰し、東京世田谷の三軒茶屋・太子堂地区で三世代遊び場マップ・図鑑づくりに従事。住民参加、子ども参画のまちづくりを進める。（社）農村生活総合研究センター研究員を経て、1992年より現職。主な著書：『遊びと街のエコロジー』[丸善／1996]、『三世代遊び場図鑑』[共編著、風土社／1999]、『ワークショップー住民主体のまちづくりへの方法論』[学芸出版社／2007]、『子どもたちが学校をつくる』ペーター・ヒューブナー著、木下勇訳[鹿島出版会／2008]など。

コミュニティデザインとは、地域の回復力を高めること

山崎 亮

Ryo Yamazaki
studio-L 代表・京造形芸術大学教授

コミュニティデザインを始めた理由

僕がコミュニティデザインを始めた理由は2つあります。ひとつは、阪神淡路大震災を経験したことです。人がつくったものが倒れてきて人の命を奪うことを目の当たりにした時に、絶対に倒れない建物を設計しようとハード面の強化を志すタイプと、人と人が信頼関係で結ばれることで危機を回避し、共同で課題を乗り越えようとするタイプがあります。僕は、災害ユートピアと言われた“人と人のつながりや助け合い”が日常的に行われるようになったらいいな、と思ったわけです。

2つ目は建築設計における時代潮流の影響です。僕が建築の設計に携わっていた2000年頃というのは、設計の根拠が見えなくなりつつある時代でした。ポストモダン一派、脱構築主義(デコンストラクティビズム)の壊れたような印象的な形は、みんながつくれば町中が壊れたような建物になって印象的ではなくなります。レム・コールハースたちがやっていたプログラム至上主義は、哲学や歴史を参照したりするそれまでのポストモダンより確かに斬新でしたが、実は先につくりたい形があり、説明は後付けのような気がしました。その次の世代は、形の根拠すら説明しないところに至った。もう一方ではコンピューテーションのようなものが入ってきて、アルゴリズムを組んだらこんな形になった、という形ありきのものが出てきた。どれも自分がやりたいことではないな、と直感したのです。

僕がいたエス・イー・エヌ環境計画室はランドスケープデザインと建築、両方の仕事をしていた事務所だったので、

公共空間の設計に多く携わりました。例えば公園設計の依頼人は、多くは役所の公園緑地課ですが、実際の利用者が見えてこない。そこで将来使うであろう周辺住民に集まってもらい、意見を聞く機会を設けました。100人の意見をまとめる方法として、ワークショップで合意形成していくことを学び、“参加型のデザイン”をやりました。ある時、ワークショップを重ねるうちに、利用主体となるコミュニティあるいはチームが形成されていたことに気が付きました。メンバー同士が仲良くなり、一緒に酒を飲み、食事をするようになる。しかし設計業務ですから、8回程度のワークショップをこなし、設計内容が決まれば解散します。せっかく良いチームが出来たのに集まるきっかけがなくなる。チームが継続的にまちづくりにかかわる方法はないものかと考えたのが次のステップでした。ならば設計の案件でなくても、まちの良い点や課題点を述べ合うだけの集まりでもよいのではないかと。彼らをまちの力にしたいと思い、ものをつくらないコミュニティデザインをやるようになったわけです。総合計画でもイベントでも、それ自体より数カ月の準備期間に出来上がるコミュニティの方が大事だと考えました。イベントが終わった後、これからどんなまちづくりを進めていきたいか、と問いながら活動を継続させるようにプロジェクト化していきます。そして、ある時期に計画的に僕たちが去っていくようなコミュニティデザインにしないとだめだと思ふようになりました。自走する体制に持っていく。人が抜ければ同じようにはいきませんが、メンバーたちで活動内容を変えていけばいいと思います。

急がれるコミュニティデザイナーの育成

現在、僕たちの事務所では80プロジェクトにかかわっています。5日に1度は行政から仕事の依頼がきますが、コミュニティデザイナーが25人しかいないので、これ以上は無理だろうとお断りしている状態です。1プロジェクトにかかる年数は約3年です。今年度で終わるのが30あるかないかですから、来年新たに引き受けられるプロジェクト数は20-30しかありません。これが悔しいですよね。皆さん困っているから連絡を下さるわけです。本当はすべてにお応えしたい。全国に1,700の基礎自治体があり、ひとつの自治体で住民参加のプロジェクトを希望しているのは、農村整備課、中心市街地活性化室、企画財政室、社会福祉課などおおよそ10件あるとします。そう考えれば、毎年全国でおよそ17,000件は誰かに発注したいと思っているということになります。そんな状況ですから、コミュニティデザイナーを育てる必要があって、山形にある東北芸術工科大学のコミュニティデザイン学科設立(2014年春)業務を81番目のプロジェクトとしてお引き受けしました。東日本大震災の復興プロジェクトで合意形成や主体形成を学生たちと共に現場でやっていたころと思っています。入学試験は、ワークショップを実施する中で、みんなの意見を引き出せるか、調整役ができるか、イラストを描く能力があるかなどを見ましたが、コミュニケーション能力の高い高校生がたくさんいることに驚きました。ここの卒業生が郷里に戻って、山積みになっている地域の仕事に就いてくれることを期待しています。

コミュニティデザインでは、教えられることと、そうでないことがあります。原理は共有しつつも、あとは自分なりのやり方を身に付けてもらう。建築家の菊竹清訓が『代謝建築論』[彰国社/1969]で書いた“か・かた・かたち”の方法論がコミュニティデザインにも当てはまるような気がしています。思想・原理を表す“か”(本質的段階)、自分なりのスタイル・技術が出てくる“かた”(実体的段階)、それを着地させる感覚や形態“かたち”(現象的段階)ですね。僕が学生たちに伝えたい“か・かた・かたち”はたくさんありますが、まずは人の話を聞くことからスタートすることです。地域の問題を地域の人たちに直接聞くことが大切です。ワークショップでは、7.5cm角の付箋をよく使いますが、これは声の大小にかかわらず同じフォーマットを使うことで、対等な立場でみんなの意見を集めることができます。合意形成の段階だけでなく、すべての段階でこうした原理、手法があります。拙著『コミュニティデザインの時代』に書きましたが、コミュニティデザイナーは“自分たちがやりたいこと、できること、地域が求めていること”の3つの輪のクロスした真ん中の部分を、地域と一緒に考えて実行するのが良いと思っています。例えば、福祉タクシー、特産品の生産販売、買い物支援システムなど、地域に生まれたチームが、最終的には僕たちの中に根付いていきます。

地域の課題は地域で解決する

いつの頃からか“税金を払っているのだから地域のことは行政がやるのが当た

り前”になっています。これは、高度成長とバブル期という税金が爆発的に増えた一時期に培われた思想であって、むしろ特殊なものだったと思います。以前は“地域のことは地域で”というのが当たり前でしたからね。お任せにしないというスタイルを現代的にどう作り直していくのかというのが、僕たちの仕事だと思っています。

行政は民間企業のように素早く対応すべきと「すぐやる課」がつくられましたが、それでは住民が行政に注文するだけになってしまいます。「すぐやる課」ではなく「あなたと一緒にすぐやる課」にすべきなのです。

高齢者が増え、若い人たちがそれを支える時代になりました。民生委員や社会福祉士、保健師、看護師と人生の終盤をサポートしている人たちは結構いますが、その一歩手前にコミュニティデザイナーがかかわれると思っています。今、手掛けている兵庫県西明石の医療施設では、建築のプログラムのコアが病院で、コアの周りにコミュニティスペースをつくる予定です。病院の待合いに年寄りが集いますが、そこでも医療費はかかっています。何となく集まって話をしているだけなら、コミュニティスペースを使ってもらおう。そこには売店や自転車屋もあり、患者さんだけでなく、誰でも気軽に立ち寄れる場所をつくることで、「また来てね」と言える病院ができる。このスペースでも、コミュニティデザイナーや地域の人たちが活躍できます。定年退職した人が何かやれる段階で地域づくりにかかわってもらう。役割も生まれ、それが日々の楽しみにもなる。そこにコミュニティデザインを使ってもら



山崎 亮

えるといいですね。

これまでは、建築などものづくりに付随してコミュニティデザインをやってきましたが、これからは社会教育分野や医療福祉分野、さらにスポーツ分野に寄り添って“地域の回復力を高めていく”ことが役割になっていくと思います。地域の人たちが本気になって立ち上がらないと、地域の問題は解決しません。住民ができることは住民でやる方が良いでしょう。しかも、楽しく、できる範囲で、地域のためになることをやる。そうすれば税金を使う行政の仕事を一定程度減らしていくことができるでしょう。その機運をどう高めていくかが、これから取り組まなければいけないことだと思っています。(談)

やまざき・りょう—— studio-L 代表・京造形芸術大学教授/1973年生まれ。大阪府立大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了(地域生態工学専攻)。東京大学大学院博士課程修了。2006年、studio-L 設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、ランドスケープデザインなどに関するプロジェクト多数。主な著書:『テキスト ランドスケープデザインの歴史』[編著、学芸出版社/2010]、『コミュニティデザイン』[学芸出版社/2011]、『コミュニティデザインの仕事』[共著、ブックエント/2012]、『まちの幸福論』[共著、NHK出版/2012]、『コミュニティデザインの時代(中公新書)』[中央公論新社/2012]など。

住民の思いを吸い上げ、地域自治の実現を目指す

20年以上続く住民主体のまちづくり支援

伊藤雅春

Masaharu Itou
NPO法人玉川まちづくりハウス運営委員長

玉川まちづくりハウスの誕生

玉川まちづくりハウスは、1991年春、住まいや身近な暮らしと環境の改善・保全に取り組む地域住民の活動を支援する非営利市民活動組織としてスタートしました。世田谷区まちづくりセンター構想を実現する住民参加の実践の場として、地区内在住のまちづくり専門家を中心に立ち上げた組織です。

耕すようにまちを育てる

玉川まちづくりハウス(以下、ハウス)の活動を振り返ると、まさに「アーバン・ハズバンドリ——耕すようにまちを育てよう」の理念の下、まちづくりとは何かを模索してきた22年間だったように思います。14年ほど前に、『新時代の都市計画 第2巻—市民社会とまちづくり』[ぎょうせい/2000]という本に、「コミュニティの元気」というテーマで次のような文章を書いたことを覚えています。「コミュニティの元気は、そのコミュニティの中にどれだけ組織体が内包されているかという点の一つの指標になるとともに、これらの組織体が実質的にどれほどの活力をもって活動しているかが重要な点である。そのうえで私たちの経験は、これら組織体どうしのコミュニケーションの機会がどのように用意されているかを見ていくことが必要であることを教えてくれている」、「まちづくりは、組織体どうしの優れたコミュニケーションシステムの源泉であり、まちづくりNPOのようなネットワーク型の組織体は、コミュニティにコミュニケーションシステムをつくり出す原動力である。これが『コミュニティとまちづくり』という課題に対

する私たちの現在の到達点である」。私たちは、22年間にこの地域にたくさんの居場所をつくり、たくさんの人と出会い、たくさんの活動組織を生み出し、地域活動のお手伝いをしてきました。例えば、「コミュニティガーデン運営委員会(1992-96年)」、「グループねこじやらし(1994年-)—ねこじやらし公園の運営団体」、「クラシック音楽を楽しむ会(1999-2013年) —個人宅で行われたCDコンサート」、「地域の福祉を考える楽多の会(2000年-) —デイサービスセンターの運営ボランティア」、「玉川田園調布住環境協議会(2000年-) —地区計画の運営組織」、「地域通貨DEN運営委員会(2000-13年)」、「玉川田園調布防犯パトロール隊(2004年-)」、「読書空間みかも(2007年-) —個人が運営している地域の居場所」、「宮本三郎記念美術館と地域の会(2008年-)」、「園田高弘邸の継承と活用を考える会(2008年-)」、「玉川まちフェスタ実行委員会(2008年-)」、「一般社団法人住宅遺産トラスト(2012年-)」、「九品仏アートフェスタ実行委員会(2013年-)」です。これらを通してコミュニティを耕すとは、「場をつくり」、「活動を生み出し」、「それらに関係付ける」ことだということが徐々に分かってきました。「成熟した地域コミュニティには、市民活動を育てる力がある」という言葉の意味を改めて実感しているところです。

コミュニティデザインを活かしたまちづくり

先に述べたように、「場づくり」、「活動づくり」、「関係づくり」の3つのレイヤーがコミュニティを支えているとすれば、コ

ミュニティデザインは、主に関係づくりのレイヤーで語られる概念だと思えます。私たちは、コミュニティデザインを意識した幾つかのプロジェクトに取り組んできました。「地域活動団体の報告会(2006年)」、「玉川まちフェスタ(2008年-)」の継続開催、「わたしのまち魅力発見マガジン(2011年-)」の発行、「絢わないワークショップ(2012年)」の実施、そして「九品仏アートフェスタ(2013年)」の開催などです。これらに共通した特徴は、いずれも複数の町内会エリアを超えて、普段は出会わないような人や場、活動組織を結び付けることを意図したプロジェクトであるということです。例えば、現在取り組んでいる「九品仏アートフェスタ」では、3つの町内会と商店会、九品仏浄真寺、宮本三郎記念美術館などをハウスがつなぎ、若い世代と地域を担っている高齢世代が出会う場づくりをアートの力を借りて実現しようとしています。私たちは決して無理はしません。じっくりと機が熟するのを待ちながら、諦めることなくここまで来た、そしてこれからも、というのが正直なところです。

コミュニティ・マネジメントへの挑戦

私たちは、コミュニティを支えているこの3つのレイヤーのすべてを耕すことをコミュニティ・マネジメントと位置付け、玉川まちづくりハウスの活動の目標としていきたいと考えています。最近2-3年のキーワードのひとつとしてハウスが掲げているのは、「コモンズ」の創出です。例えば、空き家、空き室、庭、樹木、猫などを地域で共同管理するといったことです。さまざまな活動を通して地



第5回・玉川まちフェスタ:2008年にスタートし、地域のお祭りとして定着しているバザー。第地域住民でもある雅楽演奏家・東儀秀樹氏のライブコンサートを楽しむ住民たち

域にできるだけ多様なコモンズを生み出していくこと。このことについてのハウスのこれまでの実績は、日本で最初の「コミュニティガーデン活動(1992-96年)」や13年目になる「住環境協議会(2000年-)」の活動(地区計画の運用)、個人のケヤキの移植を実現した「みどりのコモンズ(2007年-)」の活動などがあります。住宅などの個人資産も地域で管理していくことができるような自立的なコミュニティ・マネジメントを事業体として運営していくことがハウスの最終的な目標であると考えています。個人的には、地域の共同管理(コミュニティ・マネジメント)の先に、私的政府による地域の自治(コミュニティデモクラシー)の実現があると思うのですが、それが果たしてどのような姿なのかはまだ定かではありません。このまちでしかできないことをこのまち固有の時間軸の中で考え、活動していたら、知らない間に22年という年月が過ぎていたという話でした。



世田谷区自然体験遊び場づくり事業:玉川まちづくりハウスによる取り組みのひとつ。遊び道具を積んだプレーリヤカーを持ち込み、子どもの外遊びを推進している。ねこじやらし公園での紙芝居は家族連れで賑わった



「みどりのコモンズ」基金で移植費用の一部を賄い残すことができた地域のケヤキ:「みどりのコモンズ」は宅地の緑を共有財産＝コモンズと考え、「緑を次代に継ぐ」仕組み。基金設立の際は、さまざまな分野の専門家を招き、6回にわたる連続講座を開催し賛同を得た [提供3点とも:玉川まちづくりハウス]

いとう・まさはる——NPO法人玉川まちづくりハウス運営委員長・長愛知学泉大学現代マネジメント学部教授/1956年生まれ。名古屋工業大学大学院修士課程修了。千葉大学大学院自然科学研究科人間・環境科学博士課程修了。平松建築設計事務所、松本嘉雄建築研究所を経て、1987年、大久手計画工房設立。主な著書:『対話による建築・まち育て・参加と意味のデザイン』[共著、学芸出版社/2003]、『参加するまちづくりワークショップがわかる本』[OM出版/2003]、『都市計画とまちづくりがわかる本』[共編著、彰国社/2011]、『LOOKUTE Workshopping! ?まちづくりワークショップQ&A』[ノーシャルキャピタルインテグレーション/2013]など。

まちづくりの原点は人づくり “よそ者”との交流で海士の魅力を引き出す

島根県隠岐郡海士町

島根半島から約60km、日本海に浮かぶ隠岐諸島のひとつ、海士町。人口約2,400人の小さな島に、多くの若者がI・Uターンし、地域に活気をもたらしている。

約10年前、海士町は過疎化、少子高齢化が進み、厳しい財政状況にあった。2002年に就任した山内道雄町長の下、地域再生をかけた取り組みが始まる。そして島の活性化には“よそ者”と“若者”の力が必要と考え、積極的に島外とのネットワークづくりを展開してきた。

雇用創出や商品開発研修生などの産業振興策だけでなく、都市や海外との交流も実施。海士中学校の修学旅行では、一橋大学に赴き島の魅力を講義した。大学との連携は、都市地方交流プログラム「AMAワゴン」に進展し、社会起業家や学生など、多くの若者が出前授業や島体験の場を求めて、海士町を訪れるようになった。島に地域貢献したいという共感者が増え、今では人口の約1割が20-40代を中心とした移住者で占めている。こうした“よそ者”が地元住民の刺激になり、協力し合うことで産業の活性化につながった。当たり前だった地域資源に新たな価値を見出し、岩ガキ、塩、隠岐牛、干しナマコなど、“島ブランド”が次々と誕生している。

産業振興策と同時に海士町では、まちづくりの原点として“人づくり”を推進。2009年には「島の幸福論」をテーマに新旧の住民が参画し、住民主体の「第四次海士町総合振興計画」を策定した。ここから「海士町の未来をつくる会」が発足。住民自ら課題解決のための具体策を提案し、島の将来を見据えたまちづくりを示した。2011年には総務省の集落支援員制度導入により、各地区のコミュニティを活性化し、元気に活動できるようサポートしている。また、隠岐島前高校魅力化プロジェクトでは、将来、地域の担い手となる人材を育成し、循環型の島づくりを目指す。地方が抱える問題を縮図したような小さな島で、持続可能で自立した地域づくりを最先端で切り開こうとしている。 (文責：編集室)



1 隠岐産干しナマコを生産する「たじまや」の皆さん：島ブランドのひとつ干しナマコは中国に輸出。たじまやは、自給自足の食材でもてなす民宿や渡船、ツバキ栽培なども営む。写真左の宮崎雅也氏は、島根県・新産業創造ブレインで一橋大学大学院教授の関満博氏が橋渡し役となり、実現した海士中学校による一橋大学での講義に、学生スタッフとして参加したことがきっかけで、大学卒業後に移住。たじまやの姿勢に共感し一員となり、ナマコ加工会社を立ち上げた

2 人気のハーブティーをつくっている「さくらの家」の皆さん：さくらの家は、障害者の共同作業所。Iターンの商品開発研修生が、昔から島で飲まれてきたふくぎ茶を商品化したことで、安定した収入になり時給アップにつながった

3 隠岐牛を飼育する「隠岐潮風ファーム」：島の産業活性化と雇用創出につなげたいと、海士町の建設会社が構造改革特区により農業に参入。丁寧な生産販売でブランド牛に成長させた。隠岐牛の担い手になりたいIターン者に研修も行っている

4 交流施設・あまマーレの「古道具やさん」：集落支援員が運営する古道具や器のリサイクル店。地域支援のため地区を回っていく中で、高齢者から不用品の処分を相談されるようになった。島には器などの店がなく販売したところ、アンティーク風なデザインも受けて、若い世帯に喜ばれている

5 海士町の玄関口、菱浦港

大規模な団地コミュニティの再生に挑戦

住民と地元・千葉大学によるコミュニティ・ビジネス

千葉県千葉市

1950年代から80年代にかけて、首都圏の郊外を中心にニュータウンの建設が盛んに実施された。千葉市西部にある海浜ニュータウンもそのひとつで、遠浅の海を埋め立て造成された。1973年より入居開始。人口11万人が住む日本で2番目に大きいニュータウンとなった。それから40年、空き家が目立つ巨大ニュータウンで団地再生に挑戦しているNPOがある。

地元の千葉大学では、2001年頃からアンケートを実施し、今後起こり得る衰退化の内容を予測していた。県と市、UR都市再生機構、千葉大学が連携してこのニュータウンの再生計画を検討する中で、それを実践する地元密着型の組織が望まれた。そこで2003年に設立されたのが「ちば地域再生リサーチ(以下、CR3)」。千葉大学建築学科の教員と専従スタッフで構成されるNPO法人だ。この10年間、高洲・高浜地区を対象に「6つの活動の柱」(53頁下左)を据えて、住民たちと協力し、暮らしやすい環境を創造するさまざまな試みを展開している。

特に問題視されたのは、賃貸住宅でリフォームされない室内の劣化と、エレベータのない5階建て住棟における高齢者の生活サポート。そこで、DIYを核としたリフォームと、安否確認、買い物サポートをセットでビジネスモデル化した。2004年、経済産業省の補助事業に採択され、毎年100件ほど修理やリフォームを実施している。また商店街の空き店舗は「団地学校」の教室として活用。引きこもりがちな高齢者を外に出すきっかけになった。老朽化したショッピングセンターを減築し、2階の空きスペースを地元アーティストに工房として貸し出す「アート・コミュニティ美浜」のオープンをサポートするなど、数々の実績を残している。2013年からスタートした文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」[*]に採択された千葉大学は、主な連携先をCR3としている。地域コミュニティの中核的存在として、情報・技術が集まるCR3に期待されるのは大きい。(文責：編集室)

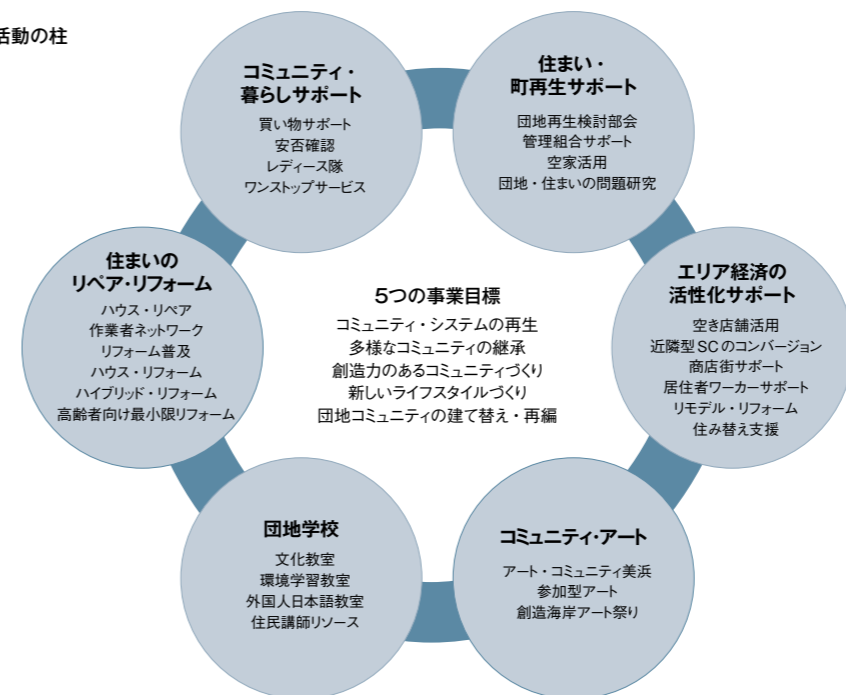


- 1 多世代交流ステーション「にこりこ」: 2013年10月に高洲第一ショッピングセンター内にオープンした、子育て中の親子や高齢者が立ち寄れる憩いの場所。多世代に向けたイベントも開催される
- 2 お宅見学ツアー: CR3主催の個人的なリフォーム事例を見て回るツアー。毎回キャンセル待ちが出るほどの人気
- 3 コミュニティスペース「アチキチ」: 稲浜ショップ内の空き店舗を活用
- 4 買い物サポート: できるだけスーパーまでは出てきて買い物を楽しんでもらいたい、という思いから、スーパーで買ったものを自宅まで届けるサービス。受益者から1回50円を回収。スーパーから協力金として1袋につき50円が出る。現在、定期的な利用者は約60名
- 5 海浜ニュータウン: 1970年代の公共住宅では主流だったステップアップ型の団地が整然と並ぶ
- 6-8 アート・コミュニティ美浜: CR3が最初の2年間、アーティストの誘致と運営をサポート。現在、木工、陶芸、漆細工など9人のアーティストが利用している。ギャラリースペースや教室もあり、管理・運営は千葉経済開発公社
[提供 1-3・8: ちば地域再生リサーチ]
[撮影 4-7: 白石ちえこ]

[*] 文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」: 自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資するさまざまな人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とした補助事業で、2013年より実施。52件が採択され、1件につき上限5,800万円の補助が行われる



6つの活動の柱



暮らす人にとって魅力あるまちに再構築する 地元の活動から“移住者が楽しめる熱海”を提案

静岡県熱海市

高度成長期には、全国有数の温泉観光地として年間600万人もの観光客で賑わった熱海。今ではその数は半減し、衰退傾向にあったが、かつての温泉観光地という視点ではない、新しいまちづくりが展開している。

主導しているのは「atamista」。熱海市出身の市来広一郎氏によって2008年に組織され2010年にNPO法人化し、地域資源や地元住民に着目した地域プロデュースを実践している。市来氏は大学卒業後、都内の企業でビジネス・コンサルタントに携わった後、地元再生のため熱海に戻ってきた。世界30カ国以上を旅した経験から、都心からのアクセスが良く、温泉以外にも豊かな自然や歴史、文化が残る熱海に、他にはない魅力と可能性を感じている。

まず手掛けたのが、熱海の人々を紹介するwebマガジンサイトの運営だった。半年間で60件以上を取材しているうちに、耕作放棄地の実態を知る。そこから地元農家と協力して農業体験活動「チーム里庭」を始めたところ、参加した移住者や別荘所有者にとっても喜んでもらった。熱海がどんなまちかわからないと話す参加者から“移住者が楽しめる熱海”にヒントを得て、2009年に地域資源を活かした体験交流型プログラム群「熱海温泉玉手箱(オンたま)」を開催した。干物づくり、「路地裏・昭和レトロ散歩」、「港で朝釣り・朝ごはん」を始め、ヨガやテニス教室など、地元の活動による地元住民のためのプログラムを提供。6回目となる2013年までに延べ260種のプログラムを実施し、5,000人以上が参加している。

2011年からは、遊休不動産を活用したエリア再生事業「現代版家守」にも着手した。レトロな建物が残り、趣ある中心市街地の空き家・店舗をリノベーションして地域に付加価値を付け、クリエイターや若手起業家ら呼び込みコミュニティの活性化を図る。地域と連携しながら、まちづくりを展開し、“100年後も豊かな暮らしができる熱海をつくる”ことを目指している。(文責：編集室)



1 カフェ・CAFÉ RoCA: エリア再生事業モデルとして空き店舗をリノベーションし、「atamista」が運営しているカフェ。地元のイベントも催すなど地域コミュニティの場として活用されている
2 「atamista」代表の市来氏
3 路地裏・昭和レトロ散歩: 「オンたま」のプログラムのひとつ。古くから温泉街として栄えた熱海には、レトロな建物が点在し、まち歩きが楽しめる
4 「リノベーションシンポジウム熱海」の会場風景: 2013年2月、地域再生プロデューサー・清水義次氏らを迎え、リノベーションによるまちづくりのシンポジウムが開催された。空き店舗を活用した会場は、来場者で満席状態になった
5 カヌー体験ツアー: 海のまちならではの「オンたま」プログラム。自然、まち、人、食など、さまざまな地元活動から熱海の魅力を知ることができる
6 「チーム里庭」による農業体験: 地元農家と一緒に芋掘りを楽しむ都会からの移住者。耕作放棄地だった畑がきれいに手入れされるようになった
7 熱海城から眺めた熱海市街地
[提供7点とも: atamista]



官民協働で“身の丈の開発”を展開する まちづくり会社「飯田まちづくりカンパニー」の活動

長野県飯田市

長野県の最南端に位置する飯田市は、森林に囲まれた人口約10万人のまちである。

信州の小京都と呼ばれた小さなまちが、“住民自治と官民協働のまちづくり”として近年、全国から注目され、視察に訪れる自治体職員も多い。

飯田市は戦前から公民館を拠点に自由教育(自由画教育と生活綴方教育)が活発に展開され、学習を通して地域を学び、課題に取り組んできた長い歴史がある。また、1947年の飯田大火で市街地の8割(約60万㎡)が焼失するという災害を経験している。1953年、災害復興で設けられた防火帯道路の緑地帯に地元の中学生の提案でりんごの木40本を植樹したことは広く知られる。“飯田のりんご並木”はまちのシンボルとなり、復興に向けてのまちづくりが始まった。

「裏界線」という防火用の裏路地を持ち、碁盤の目に区画割りされた近代的防災都市に生まれ変わった飯田のまちも、1987年頃からスプロール化により中心部の衰退が始まる。危機を感じた若手商店主が中心となり、官民共同の勉強会が行われた。この勉強会に再開開発コンサルタントの草分けと言われた植田一豊氏が招かれたことで、“身の丈の再開発を自前ですべてやる”、「飯田方式」が生まれた。外部のデベロッパーに頼まず、地域で「まちづくり会社」を立ち上げ、地元でノウハウとお金を蓄積するべきだ、が植田の持論。こうして地方都市では異例の2億円を超える資本金を集め、1998年に「飯田まちづくりカンパニー」が誕生した。事業内容は、市街地のミニ開発とデベロッパー事業、物販・飲食事業、福祉サービス事業、イベント・文化・まちづくり事業など多岐にわたる。りんご並木のモール化整備には、商店会や町会の他に、木を管理してきた中学生を交え「りんご並木市民フォーラム」を結成、ワークショップを重ねることで、1999年に幅員30mの都市計画道路の全面モール化が実現した。そして今、中心部の居住人口が増加しているという。官民協働の取り組みの成果が現れてきた。(文責：編集室)



- 1 りんご並木マップ：幅員30m、全長350mのりんご並木全体の様子
- 2 りんご並木の手入れ：飯田東中学校の生徒たちが、毎年りんご並木の手入れを行っている
- 3 飯田 丘のまちフェスティバル：毎年11月3日にりんご並木一帯を会場として開催されるお祭り。人形劇の街にちなんで、全国から約40ブース出店のフィギュアのマーケット・ガレージセールは人気。大道芸、餅投げなどが行われ、毎年2万人の人出で賑わっている
- 4 三連蔵：飯田大火で焼け残った土蔵が朽ちるままになっていたのを、「飯田まちづくりカンパニー」の提案で、りんご並木の改修に併せて、レストランとトイレを新設し、コミュニティ拠点として整備された
- 5 りんご並木：中学生の「公園のような道路」という発案から、歩行者優先道路が誕生した
- 6 修復前の三連蔵
- 7 裏界線：防火道路としてつくられた細い路地は飯田ならではの風景
- 8 飯田まちづくりカンパニー本部：なまこ壁の土蔵を事務所として使用。右は事業部長の三石秀樹氏、左は統括マネージャーの井口浩伸氏
[提供：1-3・5：飯田まちづくりカンパニー]
[撮影：4・6-8：白石ちえこ]

侘び寂びのガルテン鋼

椎名英三
Eizo Shiina

ガルテン鋼の歴史は浅い。アメリカではUSスチール社が1933年に開発し、日本では1959年に製造販売が開始された。私が初めてガルテン鋼の存在を知ったのは、今は休刊となってしまった『SD』という雑誌の創刊号だった。1965年1月号、そこに掲載されたエーロ・サーリネン設計のディアカンパニーの本社ビルは1964年4月に竣工したのだが、大きな池を前にして、ガルテン鋼のルーバーと細やかなグレーチングが付いた庇がファサードを飾っている繊細な感じの美しい建築だった。この建築のガルテン鋼の使用は徹底しており、屋内外を通して細部から構造体にまで及んでいる。サーリネンは、ディアカンパニーにおいて、それまで鉄道、橋梁、農機具などに用いられていたガルテン鋼を、建築素材として初めて用いた最初の建築家であった。

ディアカンパニーを通してガルテン鋼の驚異的な性質が、初めて世界の建築家に開示されたのである。それは、鋼表面に緻密な錆が形成され(保護性錆または安定錆と言う)、それが塗装と同じように鋼の表層をコーティングして、錆の進行を防ぐという信じられないような“錆が錆を防ぐ”性質である。

COR-TENは、CORROSION-RESISTANT、HIGH-TENSILEの略称であり、当初は耐候性高張力鋼と訳され、今は耐候性鋼と呼ばれるようになった。ガルテン鋼はその他に、塗装下地としての性能も良く、溶接性や加工性においても普通鋼と同等の性能を持っている。

鋼にとって、塗装をしなくても大丈夫だという性質=省資源省力化は、エコロジカルでエコ

ミックであり、今の時代にとってふさわしい素材と言える。

2007年竣工の「IRONHOUSE」は、建主であり構造家の梅沢良三氏と私との共同設計であるが、梅沢氏の発案で、建築を構成する主材としてガルテン鋼が選択された。地階を除きその床、壁、屋根は、デッキプレートと芯材としたガルテン鋼のサンドウィッチパネルによるモノコック構造とされ、その他に小庇、階段、手すり、サッシ、ウエザーカバー、煙突などの副部材にもガルテン鋼が使用されている。

ガルテン鋼のテクスチャは、まさに錆である。ガルテン鋼を空气中に放置して水を散布すると数十分後には、黄色い錆が発生する。屋外使用の場合、錆は経年変化してその色調を、黄色→薄茶色→茶色→焦げ茶色→黒茶色→黒紫茶色というように、錆の基調色である茶色が、深く深くより深く変化していくのだ。

その表層の錆は1-2年経過すると、ざらつきながらも安定し、手に付着することもなくなる。この物質が風化しつつ変化していく過程を前にして、日本人の誰しもが思い浮かべる美学は、“侘び寂び”ではないだろうか。

侘びは、わびしい状態であり、本来あるべき輝かしき状態より低位の状態、質素で貧しい状態のことである。寂びは、さびしい感覚であり、また錆に通じるものであって、時間の経過によって変化し、朽ちた様子を意味している。これらは共にネガティブな感覚であるが、そこに私たちの祖先は、情緒、趣、風情、味わい、余韻といった心の奥底に訴えかけてくるような清廉でしみじみとした、そして逆に豊かな感覚を見い出して、美学にまで高めたのである。

ガルテン鋼は、まさにそのような素材なのだと思います。今回ガルテン鋼を全面的に使用して、単純で平坦な面としてよりも、そこに付加物があった方が美しいということが分かった。これは不思議な体験だった。普通であれば“線を消す”、“壁を雑物で汚さない”という初歩的な美学は“Less is More”へと連続していく

IRONHOUSE

- 1 建方：床、壁、屋根合計130枚のパネルの建方順序は、①2階床パネルを構台の上に敷き込み、②外壁パネルを立て込み、③屋根パネルを載せる、となる【写真：梅沢良三】
- 2 北西面全景：ガルテン鋼の錆上げがしっとりとした風情を生み、屋根はコンター状に植栽され、まちに緑をプレゼントする
- 3 リビング：地階はアウタールームと一体の空間となるが、ガルテン鋼の細いメンバーでつくられたウインドウフレームとサッシによってシールドされる【写真2・3：相原功】
- 4 雨に濡れたガルテン鋼の外観：水を含むとガルテン鋼はより深みを増し、さまざまな凹凸や付加物が、味わい深い立面をつくり出している【写真：椎名英三】

しいな・えいぞう——建築家・椎名英三
建築設計事務所代表/1945年生まれ。1967年、日本大学理工学部建築学科卒業。1968年、宮脇建築研究室。1976年、椎名英三建築設計事務所設立。
主な作品：宇宙を望む家[1984]、光の谷[1995]、光の森[2000]、SPACE ODYSSEY [2000]、直方の海[2004]、空の光の家[2005]、星居[2005]、聖居[2008]、Microcosmos [2012]、GITANJALI [2013]など。





TOPICS

建築の皮膚と体温

— イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界

ジオ・ポンティが語る「建築を愛しなさい」を再現から読み解く

後藤泰男
Yasuo Goto
(株)LIXIL 広報部 文化企画G グループリーダー

LIXILの文化施設であるINAXライブミュージアムでは、現在、「建築の皮膚と体温—イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界」展を開催しています。イタリア・ミラノを拠点に幅広い分野で活躍した建築家、ジオ・ポンティ(1891-1979)は、モダニストでありながらも建築表装の表現を模索し、工業製品に手仕事を介在させて、そこに質感や温もりのような「皮膚感覚」を与えたと言われています。イタリアの陶磁器メーカー、リチャード・ジノリのアートディレクター時代に培った素養を活かし、カトラリーや食器、家具、装飾美術、舞台美術のデザインから、イタリアで初

めての近代高層ビル、ピレリ高層ビルを設計しました。この展覧会では、多様な材料を駆使する稀有な存在であるポンティの建築家としての仕事に焦点を当てました。

ポンティは重さを伴う建築に、「軽やかさ」と「薄さ」、「動き」を追求しました。今回の空間展示では、結果として行き着いた皮膚感覚としての「外壁」、「内壁」、「床」、「窓」について読み解き、展示テーマとしました。また、LIXILならではのやきもの技術を活かし、ポンティの代表的なタイルを再現しました。そして、それぞれの展示空間を完全に仕

切るのではなく、緩やかにつなげ、ポンティの軽やかな建築表現を体感できるようにしています。併せて、日本初公開となる貴重な図面や、ポンティ直筆のスケッチもご覧いただけます。

■ 外壁：向こうに空が見える
ポンティは、ファサードに窓のような孔を開け、空が垣間見えるというトリックにもみえるアイデアを実現してみせました。彼の代表作であるミラノのサン・フランチェスコ教会は、チャベルとその左右にある附属施設を三次元タイルのファサードでつなぎ、その連結部分に孔を開け、軽快な印象を与えています。

■ 内壁：皮膚のテクスチャ

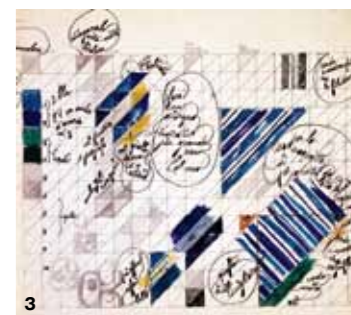
「建築は外側は精密で堅密なものが、内側は遊びと驚きに満ちた有機体です。外側は結晶ですが、内側は人生です」と例えたポンティは、壁を単なる仕切りとは考えず、孔を開けることで視線に抜けを持たせ、さまざまな素材を用いて人びとの眼を楽しませるデザインを考案しました。

■ 床：グラフィカルな仕掛け

「自然の中に置かれた建築の秩序は床から始まる。床とはテオレマ(法則)だ。床とは結晶を映すものだ。床とは、建築を完成させるすべての可動なもの(家具)と生きるもの(人を含む)が、その上で試合を交わすチェス盤なのです」というポンティの言葉に代表されるように、床は建築の皮膚の中で最も大胆な装いを与えられています。

■ 窓：リズムのコンポジション

「ピラミッドには窓がない、死者の家は封印されている。すなわち、窓は生のしるし、窓を開けて外とつながるという行為は生そのものだ」とポンティは考えたといいます。西洋建築の厚く広い壁に開けられた窓は、躯体に光と軽さを与える孔となって、粗と密のバランス関係を築いています。



1 空間展示：ヒタのような壁が上下にずれながら巡っている。上の壁で囲まれたり、下の壁で囲まれたりしながら空間が連続する
2 ホテル・バルコ・デイ・プリンチピのエントランスを再現
[写真1・2：梶原敏英]
3 ストライプデザインタイルのパターンスタディ
[提供：ジオ・ポンティアーカイヴス]
4 ホテル・バルコ・デイ・プリンチピの床タイルを使ってトラフ建築設計事務所がデザインした空間
[写真：梶原敏英]

会期：2013年11月2日-2014年3月18日
キュレーター：田代かおる
展示デザイン：トラフ建築設計事務所
特別協力：ジオ・ポンティアーカイヴス



手仕事による デザインタイルを 現代の技術で再現

小関雅裕

Masahiro Koseki

(株)LIXIL プロダクツカンパニー 技術研究本部
常滑研究所ものづくり工房 グループリーダー

タイル再現への課題

ジオ・ボンティは、建築内・外壁、床に使うタイルに強いこだわりを持ってデザインしていたことは、残された作品で分かります。ボンティがデザインしたタイルには、手業による“ゆらぎ”表現が多く含まれています。その表現を再現するには、職人感覚の手仕事によるものづくりが必須でした。それらのタイルを現代の技術を駆使して、いかに再現するか…、それがものづくり工房の課題でした。

これまで、ものづくり工房では、さまざまなタイルの復原・再現に取り組んできました。今までは、すべて見本となるオリジナルタイルを手元で確認し、研究しながら作業を進めてきました。しかし、今回の再現は、オリジナルタイルや技術資料などの正確な情報が全くありませんでした。すべて書籍などの画像資料から、オリジナルタイルの色と表情などを読み取って原料や加飾・成形技術を想定し、試作するという方法に頼らざるを得ませんでした。また、加飾・成形技術は、現代の高効率生産技術の中では避けて通らざるを得なかった古き良き時代の伝統。それは古くから職人技で培われ、伝承されてきた手描き、手掛けなどの技術を指しますが、それを今回の再現ではあえて使う…という考え方が必要になりました。

その上、与えられた制作期間は、約2か月。すべてのタイルをものづくり工房で再現するには物理的に難しい状況にありました。そこで、日頃からタイルの開発を共働している地元の製陶メーカーに参画をお願いし、「ものづくり工房ネットワーク」による再現プロジェクトとして取り組みました。それぞれ得意分野を持つメーカーの協力を得られたため、短時間で再現することができました。

再現タイル

今回再現したタイルは、オランダ・アイントフォーフエンにあるピエンコルフ・ショッピングセンターの外壁タイル、イタリア・ソレントにあるホテル・パルコ・

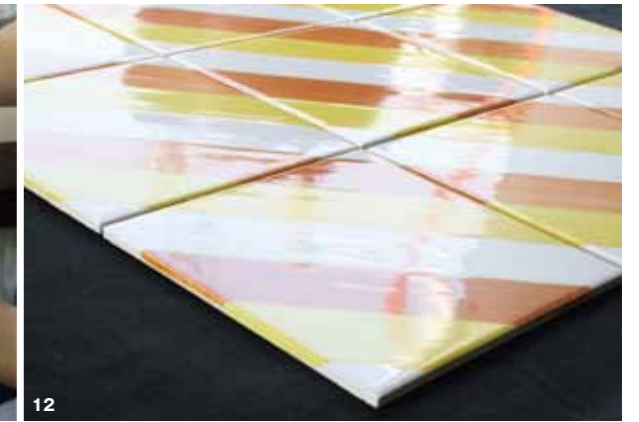
デイ・プリンチピの床タイルと内壁タイル、イタリア・ミラノにあるサン・フランチェスコ教会の外壁タイルなどです。

■ ピエンコルフ・ショッピングセンターの外壁タイル

最も再現が難しかったのは、ピエンコルフ・ショッピングセンターの外壁タイルでした。画像資料から、小口のモザイクタイルと判断し、窯変釉表現を得意とする日本モザイクタイル株式会社に協力していただき、一応の試作が完成しました。その段階で、本来は現地を訪ね、オリジナルタイルと比較・検討する必要がありますが、それが困難だったため、展示デザインを担当したトラフ建築設計事務所のオランダ在住の知人に、その作業を依頼しました。つまりオリジナルタイルと試作品を比較した写真を撮影していただき、確認していただいたのです。その時点で、オリジナルタイルの形状が想定していたサイズよりも大きく、さらに立体的であることが判明しました。予定の制作方法ではサイズを含めて微調整するのは難しいと判断し、急遽、成形は有限会社ケラモアート、焼成は株式会社アカイタイルに協力をお願いしました。その結果、予定の時間内で再現することができました。

■ ホテル・パルコ・デイ・プリンチピの床タイルと内壁タイル

すでに商品化を予定していたホテル・パルコ・デイ・プリンチピのブルーの床タイルは、制作当時は、1枚ずつ手描きするステンシル技法でつくられたもので、刷毛目がすべて異なるタイルでした。その手描きの雰囲気を再現タイルで表現できるか。量産品のように同じパターンの繰り返しに見えないよう工夫したい。その結果、1デザインごとに3パターンの刷毛目を用意し、自然に変化が出せるようにしました。加えて、手掛け釉面のゆらぎを再現することによって、面全体に豊かな表情を生み出すことができました。また、同じホテルのロビー受付壁に張られた小石形のタイルも、画像資料からサイズと形状を割り出



しました。3千個以上の数量を型鑄込みによる成形で制作しました。そして床タイル同様、すべてが異なる形状に見せるため、微妙に違う6形状のタイルを1単位としてつくりました。展示にあたっては、間隔、方向など、自然なバラつきを持たせて張り、少しでもオリジナルに近付くよう努めました。

■ サン・フランチェスコ教会の外壁タイル

ダイヤモンド形状をモチーフにデザインされた山形の外壁タイルは、シャープさとわずかな色の変化を再現するため、変形が出ないよう、肉厚調整にこだわりプレス成形としました。太陽光の下で変化する、微妙な色のバラつき、それに釉薬の調整で応え、ボンティの目指した表情や体温を再現しました。

ボンティは、手業によって丁寧に仕上げられた表情豊かなタイルを好みました。建築そのものが太陽光や気候、周辺環境を映し、生き物のように建築の表情を変化させていくからです。その表情をいかに再現するかが、今回のプロジェクトの最大の課題でした。完成した再現タイルの展示を見て、「ジオ・ボンティの真意を初めて実感できた」と制作に

かかったスタッフや地元メーカーの方々に言っていただきました。

今回の経験を踏まえ、高効率生産技術では表現が難しい“表情と体温を感じる生きたタイルづくり”の取り組みを、今後も「ものづくり工房ネットワーク」の各メーカーと連携し、進めていきたいと考えています。

5 タイル再現を担当した社内外関係者

[写真：梶原敏英]

6 ピエンコルフ・ショッピングセンターのオリジナルタイルと試作品の色・表情の確認風景

7 再現タイル

8 ホテル・パルコ・デイ・プリンチピの再現床タイル

9 同内壁タイル：6形状2色で再現

10 ヴィラ・アレアザのダイヤモンド形再現タイル

11 ガッピャネッリ社の再現タイル：手描き絵付け風景

12 再現タイル：釉薬の手掛けで、ゆらぎ面を表現



建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

http://archiscape.lixil.co.jp/

建築やまちづくりに携わる専門家向けの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内です。

特集、連載コラム、施工事例などのコンテンツを充実させ、タブレットでも使いやすいデザインで、興味のあるカテゴリーを登録することによって、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能も搭載しています。また、LIXIL 商品をご採用いただいた豊富な施工事例を集約し、「建築・施設から探す」と「商品・部位から探す」の2軸での検索が可能です。各施工事例の詳細ページでは採用商品の紹介ページ、WEBカタログ、CADデータへのリンクを設置していますので、設計業務に必要な関連情報にすぐにアクセスすることができます。【LIXIL eye】のバックナンバーもご覧いただけます。

LIXIL 独自の豊富な情報をタイムリーにお届けする「アーキスケープ」を、ぜひご活用ください。

http://archiscape.lixil.co.jp/



施工事例 index

ワテラス・タワー棟 (エントランスロビー)

JR御茶ノ水駅の淡路町エリアに、オフィス、住宅、店舗などが入る、大型複合ビル「ワテラス」が誕生しました。タワー棟のエントランスロビーに、大型建材・テラコッタ、レリーフタイルが採用されています。方向性を持たせた大型タイルの壁面は、光の移り変わりによって表情を変え、繊細で、豊かな空間を生み出しています。



■ 建築概要 ■

所在地：東京都千代田区神田淡路町2-101.103.105 | 規模：地下3階、地上41階、塔屋1階 | 構造：S造、SRC造 | 工期：2009.11-2013.3 | 設計：佐藤総合計画 | 施工：大成建設

ワテラス・タワー棟 (オフィスフロア)

「ワテラス」タワー棟の中層に位置するオフィスフロアには、最先端ビルにふさわしい高機能で使い心地の良い、トイレ空間が配置されています。大きな開口を持つ室内は、シックな色調でカラーコーディネートされ、より都会的な雰囲気を醸し出しています。プライベートを重視したゾーニングやタワーならではの景色も楽しめる、明るく開放的な空間が大きな特長になっています。



いすみ市立岬中学校

千葉県房総半島の外房、九十九里海岸の最南端に位置する中学校に設置された、雨よけ・日よけ用の通路用シェルターです。自転車通学の生徒が多いため駐輪場と一体的に計画されており、シャイングレーを採用したため、周りの緑と調和し、優しい印象を与えています。



■ 建築概要 ■

所在地：千葉県いすみ市岬町椎木 1370 | 施主：千葉県いすみ市

JR 喜多方駅

JR 喜多方駅前ロータリーの機能向上を目的にした整備計画です。ここでは、バス停と駐輪場に積雪地域や強風地域向けに開発されたシェルターが採用されています。なだらかな傾斜を付けた強度の高いスチール折板によって、屋根の雨水や雪解け水がスムーズに樋へ流れるように設計されています。



■ 建築概要 ■

所在地：福島県喜多方市町田下 | 施主：福島県喜多方市建設部

LIXIL からのご案内



LIXPO 2014

「LIXPO 2014」のご案内

建築関連のプロユーザーを対象とした「リクシルの“暮らしを育てる。”展示会「LIXPO (リクシポ) 2014」を開催します。「パッシブファースト」、「ユニバーサルデザインリフォーム」、「家事・子育てサポート」、「防火戸シリーズ」、「トレンドコーディネート」、「サービス付き高齢者向け住宅」、「ショップリフォーム」、「マンションリフォーム」、「ビル環境複合化技術」といった暮らしにかかわる9つのテーマの展示を行い、LIXIL 商品やサービスを通じた提案や取り組みをご紹介します。

開催期間は中部・3月5、6日、関西・3月12、13日、東北・5月14、15日です(東京は終了しました)。会場詳細はWEBサイトをご覧ください。

http://www.lixil.co.jp/s/lixpo/

「LIXIL デザインコンテスト2013」受賞作品決定

応募総数294点の中から、一次、二次(公開)と厳正な審査を経て、金賞「後山山荘 一聴竹居@柄の浦一」の他、銀賞、銅賞、審査委員特別賞、入賞など計16点が決定しました。審査は内田繁氏(インテリアデザイナー・審査委員長)、木下庸子氏(建築家・審査委員)、西沢立衛(建築家・審査委員)、小田方平((株)LIXIL 総合研究所長)で行われました。なお受賞作品を掲載した優秀作品集は、6月に刊行予定です。

http://www.lixil.co.jp/design-contest/



金賞「後山山荘 一聴竹居@柄の浦一」
設計：UID / 前田圭介
写真：Hiroshi Ueda

LIXIL 出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/

LIXIL BOOKLET『ブルーノ・タウトの工芸——ニッポンに遺したデザイン』

執筆：田中辰明、庄子晃子 定価：1,890円(税込、好評発売中)



「食と建築土木——たべものをつくる建築土木(しかけ)」

執筆：後藤治、二村悟、写真：小野吉彦、対談：藤森照信、島村菜津
定価：2,415円(税込、好評発売中)

「地域社会圏主義 増補改訂版」

執筆：山本理顕、上野千鶴子、金子勝、平山洋介他
定価：2,625円(税込、好評発売中)

上—「食と建築土木——たべものをつくる建築土木(しかけ)」
下—「地域社会圏主義 増補改訂版」

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

10+1 DATABASE http://db.10plus1.jp/

雑誌「10+1」の全記事について検索できます。

ギャラリー＋イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXIL ギャラリー | 東京

建築とデザインと その周辺をめぐる巡回企画展

ブルーノ・タウトの工芸

——ニッポンに遺したデザイン展

会期：3月6日[木]-5月24日[土]

戦前、約3年半日本に滞在したドイツ人建築家ブルーノ・タウト。日本で取り組んだ工芸品に注目し、残された貴重な作品を通じて彼が目指した世界観を紹介します。



パイプ掛付き木製煙草入れ
【個人蔵】
撮影：益永研司

現代美術個展

伊藤幸久展 [彫刻]

会期：2月28日[金]-3月25日[火]

アーティスト・トーク

日時：2月28日[金] 18:00-19:00



「泣いたツバメ」
[300×650×100mm]
陶、水彩絵具、ビニールひも | 2010年

やきもの個展

金貴妍展

会期：3月6日[木]-27日[木]

アーティスト・トーク

日時：3月8日[土] 17:30-18:00



「work 1212-1」
(部分)
[695×370×340mm] 磁器 | 2012年

LIXIL ギャラリー | 大阪

建築とデザインと その周辺をめぐる巡回企画展

背守り——子どもの魔よけ展

会期：3月7日[金]-5月20日[火]

子どもの魔よけとして着物の背中に縫い取られた「背守り」、端切れからつくられた「百徳着物」。子どもの命を守る豊かな造形と衣文化を紹介します。



「背守り」
【所蔵：真成寺
(石川県金沢市)】
撮影：石内都

INAX ライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと

生活文化をつなぐ企画展

建築の皮膚と体温——イタリアモダン

デザインの父、ジオ・ポンティの世界

会期：開催中、3月18日[火]まで

会場：「土・どろんこ館」企画展示室

入館料：共通入館料で企画展も観覧可

1本のスプーンから高層ビルまでデザインし、イタリアモダンデザインの父と呼ばれるジオ・ポンティ。「軽やかさ」、「薄さ」を追求した建築の皮膚(表面)へのこだわりを、空間展示や直筆スケッチなどから読み解きます。



イタリア・ソレントにある
「ホテル・バルコ・ディ・プリンチピ」の
再現タイルによる展示空間
【撮影：梶原敏英】

【LIXIL ギャラリー | 東京】

所在地：東京都中央区京橋3-6-18

東京建物京橋ビル LIXIL GINZA 2階

Tel: 03-5250-6530

開館時間：10:00-18:00

休館日：水曜日

【LIXIL ギャラリー | 大阪】

所在地：大阪府大阪市北区大深町

4-20 グランフロント大阪タワーA 12階

Tel: 06-6733-1790

開館時間：10:00-17:00

休館日：水曜日

【INAX ライブミュージアム】

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130

Tel: 0569-34-8282

開館時間：10:00-17:00

(入館は16:30まで)

休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)

共通入館料：一般：600円、

高・大学生：400円、

小・中学生：200円

が空へと続いています。地上とは別世界がそこに広がっています。それにも感動しました。阿蘇で感じるのは、スケールの大きさです。時間的にも空間的にも、私達人間の存在が小さく感じられるほどの雄大さを感じます。でも、大きな時空間の流れを感じることで、かえって勇気づけられる私達がいるようにも思います。京都は、現場があつてよく通つていますが、街の小ささと山に囲まれた独特な地形が印象的です。また、他のどの地方も持っていないような特別な歴史と文化と伝統、気品のようなものがあり、圧倒されます。鴨川を上流に上がるにしたがつて、静かな雰囲気になつていき、違う時代に入つていくような移り変わりが感じられ、たいへん美しいと思います。京都に住むのは楽しいのだからなど、思つたりもします。ふとしたところから

底なしの深さが始まるような感じがします。東京のような近代的な街が持つていない魅力です。

瀬戸内海では、犬島と岡山によく通つています。この地方にも素晴らしいものがいっぱいありますが、やはりまず驚くのは、瀬戸内海の静けさ、美しさです。早朝の船に乗つて、窓の外に広がる海と空の美しさを呆然と眺めることが多いです。波がなく、穏やかで、まるで時が止まつているような、感じます。漁師の人々が水上で漁をして、その横をタンカーが通り、島々で人々が生活して、島と海に展開する生活の広がりには本当に素晴らしいと思います。

日本列島は何万年前から地面が隆起して作られたらしいですが、それぞれの独特な風景はそれぞれの特別な地形により作られ、そこにそれぞれの生活が寄り

添っているように思います。日本を島国としてひとつのまとまりのように思いがちでしたが、部分をクローズアップしてみると、本当に多様な地形で出来上がつていて、いろいろな地域、場所があるのだなあと思われます。それを私達日本人が認識するのは、すごく重要なことのように思うのです。

そういう素晴らしいですが、私は若い頃なかなかわかりませんでした。今は毎年楽しみにしている春の桜でさえ、春は何となく生暖かくて、輪郭がぼんやりする感じがして嫌いでした。クマさんは、日本についてどう思いますか？ 日本の地形や文化、生活ということについて、どのように思っていますか？

二〇一三年十一月二四日

妹島和世

せじま・かずよ——建築家/日本女子大学大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務を経て、1987年、妹島和世建築設計事務所設立。1995年、西沢立衛とSANAA設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、ニューミュージアム[2007]、ROLEXラーニングセンター[2009]、犬島「家プロジェクト」[2010,2013]※、ルーブル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

妹島和世様

妹島さんは、若い頃、桜が嫌いだったというのをおもしろいですね。輪郭が曖昧なのがイヤだったという理由も素敵です。僕は子供の頃から、固くて死んでい

る建築より、生きていて、やわらかい植物や動物にひかれるタイプの子供でした。それもヴィジュアルから入るのではなく、生きていて、僕に反応して答えてくれる感じにひかれていました。

だから、子供の頃から、庭を小さなシャベルで耕して、種を植えて、水をあげて、その植物が芽を出して、育つていくのを、しゃがんで眺めているのが大好きな建築より、生きていて、やわらかい植物や動物にひかれるタイプの子供でした。それもヴィジュアルから入るのではなく、生きていて、僕に反応して答えてくれる感じにひかれていました。

この急斜面を登り切ると、突然、視界が開け、緑色をした時間が終わって、山の上に来るのです。

大倉山の上は梅林が有名でしたが、僕は梅林には興味がありません。そこは視覚的なヴィジュアル系の世界で、僕の身体とは距離のある、客観的で冷たい世界なのです。その世界に属してしまうと、植物であっても、魅力を失います。

だから、僕は、あの時の竹林を取り戻すことにずっと興味があります。ずっと後になってからの話ですが、大学院で修士論文を書くという時に、「住居集合と植生」という奇妙なタイトルを選びました。実は「住居集合」という方はどうでもよくて、「植生」という方をつきつめてみたかったのです。当時の僕は原広司の研究室に所属していて、研究室の大きなテーマが、「住居集合論」だったので、建前上「住居集合と植生」にならざるをえなかっただけのことで。簡単にいえば、あの竹林の時間の秘密を探ってみたくなった。あの竹林に帰りたいだけのことです。房総半島に調査にだけかけました。里山の神社をめぐる、そのまわり

の森の中を歩き回ったのです。農学部において樹木に詳しい友人を連れ、照度計を持参しました。里山には必ず神社があります。鎮守の森といういい方もあります。日本の自然の中でもとても魅力的な資産です。その秘密を解き明かしたいと思つて樹種をひとつひとつ書きとめ、照度の変化、グラデーションを記録しました。

二〇一三年十二月四日

しかし、そんな「科学的なアプローチ」で、森の魅力にはせまれないということがすぐにわかりました。まったくまとまりのない、ひどい論文になりました。でもそれでよかったのだと思います。房総の変化に富んだ里山を、あんなにゆつくりと歩きまわれたのだから。



祖父の家と父の家の間の道

妹島和世

くま・けんご——建築家・東京大学教授/1954年生まれ。1979年、東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。
主な作品：水/ガラス[1995]、森舞台/登米市伝統継承館[1996]、馬頭広重美術館[2000]、根津美術館[2009]、梶原木橋ミュージアム[2010]、浅草文化観光センター[2012]、長岡シティホールオーレ[2012]など。

日本の地形や文化、生活… どのように思っていますか？

隈研吾様

最近、出張先でばったり会わなくなりましたね。クマさんは今、どの辺りを移動していらつしやるのでしょうか。私はこのところ、日本のいろいろな地方を訪ね歩いてます。気仙沼、奥松島、京都、熊野、瀬戸内海、阿蘇。そして改めて驚いています。日本には本当に美しい所がたくさんあるのだと。

昔設計させていただいた熊野古道なかに美術館が十五周年を迎え、それに合わせて美術館が、SANZAN展を開いてくださっています。それで久しぶりに美術館を訪ねましたが、工事中に植えた樹木が今では大きくなって、建物を隠してしまうほどになっていました。なかへ

ち美術館は白浜空港から一時間ほどかかります。熊野は、リアス式と呼びたくするような地形が山の中に展開します。巨大な山が次々と目の前に現れ、圧倒されます。山の造形が足下まではっきり見えて、山と山の間の深い所に、川がゆつくと流れています。川に沿って上流に向かっていく時、どんどん神話の世界に導かれていくように感じます。川沿いで休んでいると、猟銃の音がばんと鳴って、鹿を川に追い込んでいく風景を目にします。静けさの中、銃声がこだまするのを聞くと、熊野に來たんだなあと思います。

奥松島の宮戸島も、とても美しい所です。リアス式海岸が展開する島なので、岬をひとつ越えたとまったく異なる谷戸や入江が登場し、いくつもの秘境的な美しさがひとつの島の中に集まっているなと感じます。海が陸に奥深く入って来たり、岬が海に飛び出して行ったりと、海

とのダイナミックなやりとりが地形を作っています。

阿蘇は海から離れた奥で、突然大地が盛り上がってます。更にそこから山並み



宮城県東松島市宮戸島の風景

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。

